

# 石鎚権現遺跡群発掘調査報告

— 県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査 —

1981

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

石 鎚 権 現 遺 跡 群 発 掘 調 査 報 告

正 誤 表

頁	行	誤	正
1	13	文化庁官	文化庁長官
3	注 (2)	潮見浩『弥生式土器雄成本編Ⅰ』 山陽地方Ⅰ 1964	潮見浩『山陽地方Ⅰ』 『弥生式土器集成本編Ⅰ』1964
6	7	10 <sup>m</sup>	10cm
	16	扱えられよう	扱えよう
13	第10図	S B覆土：7	S B覆土
14	6	住居痕跡	住居跡
22	28	盤形	盤形
25	6	(約2倍) 12は	(約2倍) 13は
	7	13は	12は
	7	盤状	盤状
29	19	点存	点在
34	32	近代生活史解明	近代の生活史を解明
35	注 (3)	『丸山古墳群一調査の概要』1977	『丸山古墳群一調査の概要』1977
図版11		すべて(3枚)天地逆	
図版12		万年街山中世墳墓	万年寺山中世墳墓

石 鎚 権 現 古 墳 群 発 掘 調 査 報 告

正 誤 表

頁	行	誤	正
3		第3図 さしかえ	
11	21	用いられた	用いられた

## 目 次

I はじめに	(1)
II 位置と環境	(1)
III 遺跡群の調査概要	(4)
IV 遺構と遺物	(6)
(1) 石鎚権現遺跡の調査	(6)
(2) 石鎚権現第5号古墳の調査	(15)
(3) 万念寺遺跡の調査	(26)
V ま と め	(35)

## 例 言

1. 本報告書は県営農地開発事業に伴い、昭和55年9月から昭和56年1月にかけて実施した石籠堆現遺跡群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島県教育委員会から委託を受け財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書は、青山透・三枝健二・高倉浩一・森重彰文が分担して執筆し、協議して編集した。
4. 出土遺物の写真は鍛治益生・加藤光臣・嶋田滋が撮影した。
5. 石籠堆現第5号古墳主体部の土壌分析は広島大学理学部柴田喜太郎氏、出土遺物については広島大学考古学研究室の御教示を得た。記して感謝したい。
6. 本報告に使用した遺構表示記号は、住居跡＝SB，土塚＝SK，溝＝SD，井戸＝SE，石組＝SG，石列＝SI，中世墳墓＝ST，集石遺構＝SU，その他＝SXである。
7. 本報告に使用した50,000分の1地形図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の地形図を複製したものである。(承認番号)昭和56中復，第26号。

## I はじめに

本遺跡群の所在する福山市駅家町は、古代には吉備品治國の領域に含まれ、現在もその当時を想起させる遺跡が数多くみられる。本遺跡群のある大橋・今岡地区は、芦田川の右岸に位置し、左岸に比べ確認済の遺跡が比較的少ないものであったが、今回の調査により右岸地域にも重要な遺跡が存在することが明らかとなった。

本遺跡群の調査は大橋地区県営農地開発事業に起因するものである。同事業は福山市の急激な工業化に伴い、野菜生産の環境条件が著しく劣悪となったことから、野菜生産に適した立地にある大橋地区に計49.2haの野菜生産団地を造成しようとするものである。

本遺跡群については、昭和53年3月、県農政部長から県教育長あてに農地開発事業地内における埋蔵文化財の有無についての照会があり、県教育委員会では分布調査（昭和53年7月）と試掘調査（昭和54年9月）を行ない、それによって確認された遺跡の一つが本遺跡群である。昭和54年11月、県農政部長から県教育長あてに昭和55年度開墾地区の発掘調査の依頼があり、昭和55年8月、文化庁官あて発掘届を提出した。

発掘調査は文化庁と農林省の覚え書き第5項にもとづき、農政部負担分について財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

なお、第6・7・8号古墳については農民負担相当分として県教委で発掘調査を行い、住居跡群及び第5号古墳、万念寺遺跡については当センターで実施した。

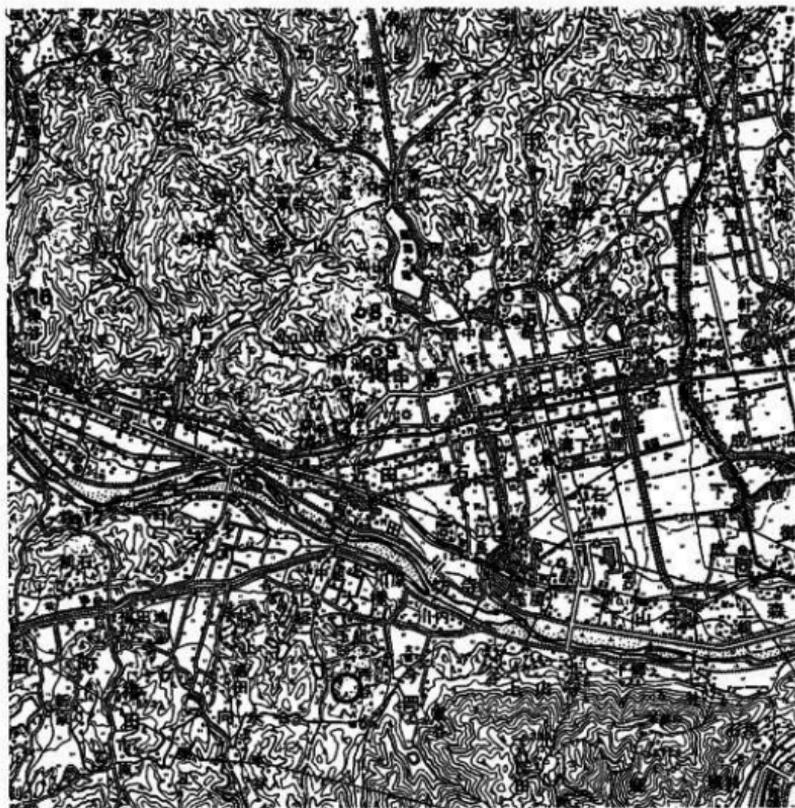
調査は1980年9月8日から1981年1月31日まで延べ約90日間をかけて行った。

なお調査にあたっては、福山市教育委員会、広島県福山農林事務所産品土地改良事業所及び地元大橋・今岡・向永谷地区の方々から多大な協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。

## II 位置と環境

石鐘椗現遺跡群の位置する福山市駅家町一帯は備南の一級河川芦田川の下流域にあたり、中国山地に源を発した水流はこのあたりで神谷川・有地川・服部川など大小の河川を合流し、いっそう大きな流れとなる。芦田川をはさんで、北は広大な神農平野となどらかな低丘陵が形成されているが、南は狭長な神農地と急峻な丘陵が続いている。古くは縄文時代から弥生、古墳時代を経て歴史時代に至るまで数多くの遺跡が存在し、県内でも有数の遺跡密集地として知られている。

縄文時代の遺跡については不明な部分が多いが、弥生時代になると中島地区の標高70mの低丘陵<sup>(1)</sup>に位置する地蔵堂遺跡群、手切谷遺跡群、池の内遺跡群があり、中期～後期の住居跡群や墳墓群が調査されている。また、神谷川が芦田川と合流する東岸丘陵には、備南の弥生後期の



第1図 石籠権現遺跡群周辺遺跡分布図 (1:50,000 井原)

1. 北塚石棺    2. 猪の子第1号古墳    3. 石籠山第1号古墳    4. 掛迫第6号古墳
  5. 山の神古墳    6. 二塚古墳    7. 大迫古墳    8. 宝塚古墳    9. 二子塚古墳
  10. 池ノ内遺跡群    11. 地蔵堂遺跡群    12. 手切谷遺跡群    13. 才谷遺跡群
  14. 廻越・大塚谷遺跡群    15. 大佐山白塚古墳    16. 神谷川遺跡    17. 潮崎山古墳
- は石籠権現遺跡群

類式遺跡として著名な神谷川遺跡<sup>(3)</sup>があり、高地性集落の要素をもつ遺跡としても知られている。

古墳時代では集落跡として6世紀末～7世紀前半頃の方形住居跡が検出された才谷遺跡群<sup>(3)</sup>があるのみであるが、古墳はかなりの内容が知られている。まず、4世紀に遡ると考えられるのは、芦田川南岸の急峻な丘陵頂部に位置し、三角縁神獸鏡を出土した潮崎山古墳<sup>(4)</sup>がある。また昨年度発掘調査された石鍋山第1号古墳<sup>(5)</sup>は竪穴式石室を主体とした円墳で、吾作銘二神二獸鏡を出土し、前者に次ぐ古墳として注目されている。5世紀前半には掛迫第6号古墳<sup>(6)</sup>があり、竪穴式石室を内部主体とする前方後円墳で、三角縁神獸鏡を出土している。後半期になると、古墳の内部主体に横穴式石室をもつものが現われ、その大規模なものは原部川流域付近に集中している。このうち山の神古墳<sup>(7)</sup>は短い片袖式の羨道をもち、側壁は持送り技法で、穹窿形をした天井部を形成している。6世紀中頃から7世紀にかけては、二子塚古墳・二塚古墳・宝塚古墳大迫古墳<sup>(8)</sup>などがあり、なかでも二子塚古墳は全長48mの前方後円墳で、主体部は羨道長さ6.5m、玄室長さ6.5m、幅2.15m、現高2.5mを測り備南では最大規模の横穴式石室である。終末期になると、大佐山白塚古墳<sup>(9)</sup>など大形の切石を使用した横穴式石室や、横口式石櫛を主体とした曾根田白塚古墳<sup>(10)</sup>、落の子第1号古墳<sup>(10)</sup>、尾市古墳<sup>(10)</sup>や北塚石棺など大化の薄葬令を意識した襲内的色彩の強い特殊石室墳が営まれている。

注)

(1) 広島県教育委員会『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976

(2) 潮見浩『弥生式土器集成本編1』山陽地方 1964

(3) 注(1)に同じ

(4) 脇坂光彦「広島県芦田郡潮崎山古墳について」『古代学研究第90号』1979

(5) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鍋山古墳群』1981

(6) 掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」『芸備文化』第5・6合併号 1966

(7) 府中高等学校地歴部「古代古備品治國の古墳について」『府高学報』1967

(8) 注(7)に同じ

(9) 注(7)に同じ

(10) 芸備友の会「広島県の主要古墳」『芸備第9集』1979

(11) 村上正名「広島県下における史跡指定の古墳について」『広島県文化財調査報告・第1輯』1954

(12) 脇坂光彦「大佐山白塚古墳研究メモ」『芸備第8集』1979

(13) 注(12)に同じ

(14) 落の子古墳調査グループ「広島県史跡、落の子古墳について」『芸備第2集』1974

(15) 堂元岡「備後における三個の特殊石室墳」『広島県史跡名勝天然記念物調査報告・第6輯』1951

脇坂光彦「広島県における終末期古墳の一例、一尾市1号古墳について」『古代学研究第95号』1981

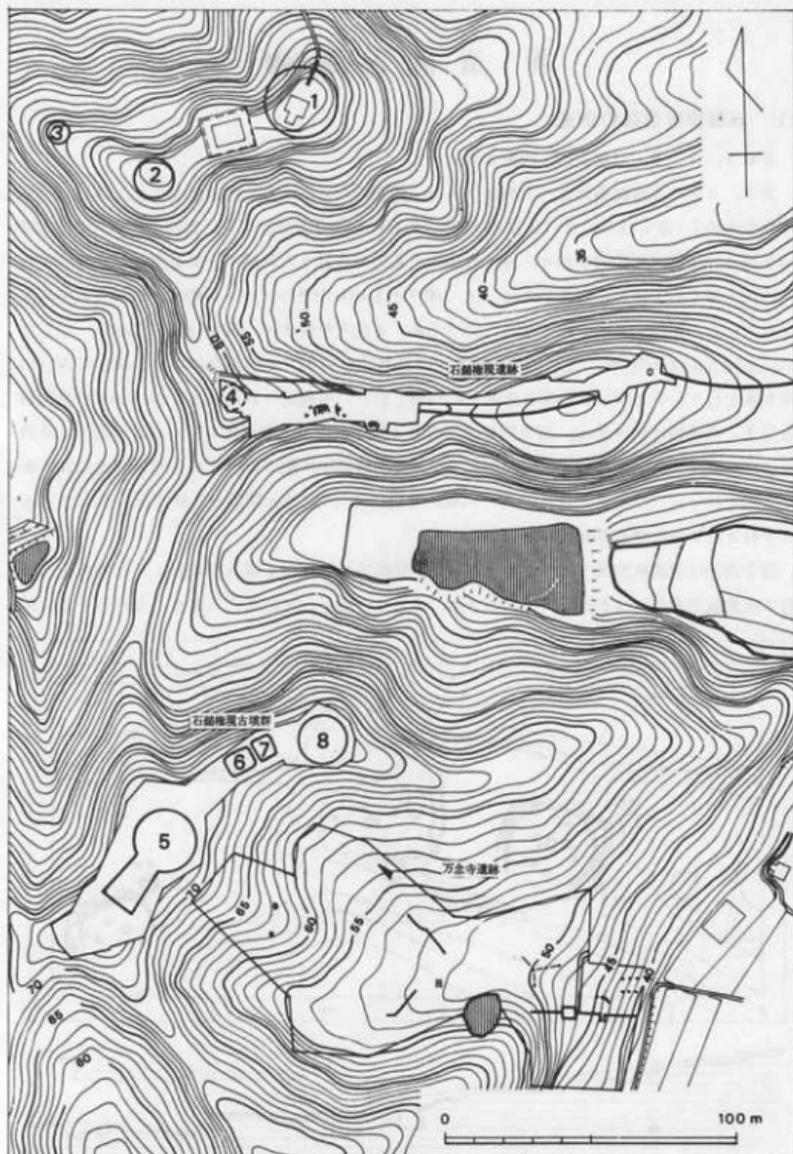
### Ⅲ 遺跡群の調査概要

本遺跡群は標高60～70m前後の丘陵と谷部に位置し、眼下に芦田川を挟んで平野部が広がりを見せる。丘陵の西から東へ派生する各尾根の頂部に弥生時代の集落跡と古墳群が存在する。古墳群は現在の石鎚権現社の存在する尾根に第1～3号、本年度調査区に第4～8号が存在する。なお本古墳群は全国遺跡地図（昭和42年）においては西谷古墳群と名称されている。

石鎚権現遺跡は全長140m、幅約13mの東西に長い尾根頂部に弥生時代後期の住居跡7軒と土坑及び袋状土坑等を検出している。本遺跡は早くから削平を受け畑地と松林に開墾され、深い地境溝が尾根に平行して東西に走っている。調査は尾根筋を中心に10mごとに区を設定し進めた。遺跡は調査区の西半分で南斜面に重複した住居跡と、調査区東端で大形の土坑1基を検出したにすぎない。調査面積は1,300㎡である。なお調査区に含まれる石鎚権現第4号古墳は流土が著しく地山が露出した状態であり、主体部その他の確認はできなかった。

石鎚権現第5号古墳は全長37.5mの前方後円墳である。本古墳の所在する丘陵は全長140m、幅15～20mの北東に屈曲しながらのびる尾根で、最高所に第5号古墳、以下南へ第6・7・8号古墳と続き、眼下に神辺平野を、また石鎚権現遺跡を指呼の間に臨むことができる。調査は前方後円墳に5mメッシュを設定し調査の簡便を計った。調査区の東側では比較的残りの良好な葎石を検出したが大半は流出し、西側においては砂防工事により削平が行なわれていた。主体部は後円部中央に疎櫓1基が検出でき、仿製の内行花文鏡、鉄製武器類が出土している。また前方部前面の浅い溝内に4基の土坑と焚火跡が、さらに西斜面に3基の土坑が検出され、そのうちの1基より全国的にも出土例の少ない飛禽鏡（鏡片）が出土している。本古墳の南側に続く尾根線にも遺構の広がり可能性があり調査を進めたが土坑2基とピットを検出したにすぎない。調査面積は約1,700㎡であり、石鎚権現遺跡と併行して調査を進めた。

万念寺遺跡は石鎚権現第5号古墳のある丘陵を東より刻む谷の谷底にあり、全長約150mの平担部が認められた。谷は「万念寺谷」と呼ばれ、花崗岩切石を用材とした井桁をもつ井戸・池が認められていて、瓦片を散見することができた。調査面積は約8,000㎡で、調査は幅2.5m・3mのトレンチを配して遺跡範囲の確認より開始した。遺跡は、表土層→黄色砂質土層→茶褐色砂質土層を基本層序としていて、黄色砂質土層下底面が遺構確認面である。検出した遺構は井戸を中心に石組遺構が顕著である。谷に向かう丘陵を万念寺遺跡として調査を行ない、中世古墳1、集石2を検出した。



第2圖 石鐘樓現遺跡群位置關係圖及び調査区 (1:2,000)

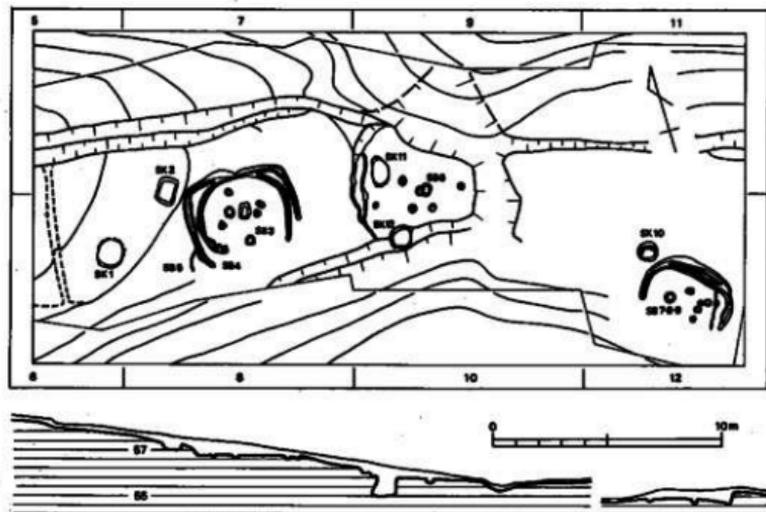
## IV 遺構と遺物

### (1) 石籠構現遺跡の調査

S B 3, 4, 5, (第4図, 図版2 a)

A 7, 8区の丘陵南斜面寄りで検出された。開墾のためいずれも南辺部を欠き、東辺は周溝のみを止める。最も残りの良いS B 4は約 $3.7 \times 5$  mの隅丸方形を呈し、北西コーナーで壁高60 cmを測る。周溝は幅約15~20 m, 深さ約10 cm, 北辺でS B 3の周溝に一部重複し、溝底のレベルは西半部で若干高く、東辺部では、径、深さとも10 m内外のピットが約50 cm間隔で溝中に配されている。床面中央やや西寄りに $1.5 \times 1.5$  mで4柱穴を残すが、深さは10~25 cmと一定しない。主軸方向はN81°W。土層断面の観察ではS B 3を切り、その部分に1~3 cm程の厚さの貼り床を行う。S B 3はこの貼り床直下に周溝と柱穴のみ検出され、推定 $3.3 \times 3.9$  mの楕円形を呈す。周溝幅は10~20 cm, 深さ約15 cmでS B 4同様に西半部で溝底レベルが若干高く、北西および東南コーナーでS B 4同様のピットが計4ヶ所溝中に配される。床面はほぼ中央に $70 \times 40$  cmで深さ15 cm程の小土塚を有し、その両側に主軸に沿って1.2 m間隔で2柱穴をもつ。S B 5はS B 4に切られ壁高5 cm弱をとどめる。

出土遺物は遺構検出面で出土したすり石(第10図2)と壺形土器(第8図2)以外は全てS B 4床面直上もしくは若干浮いて検出され、S B 4一括として扱えられよう。高坏形土器(第



第3図 石籠検現遺跡遺構配置図(1:250)

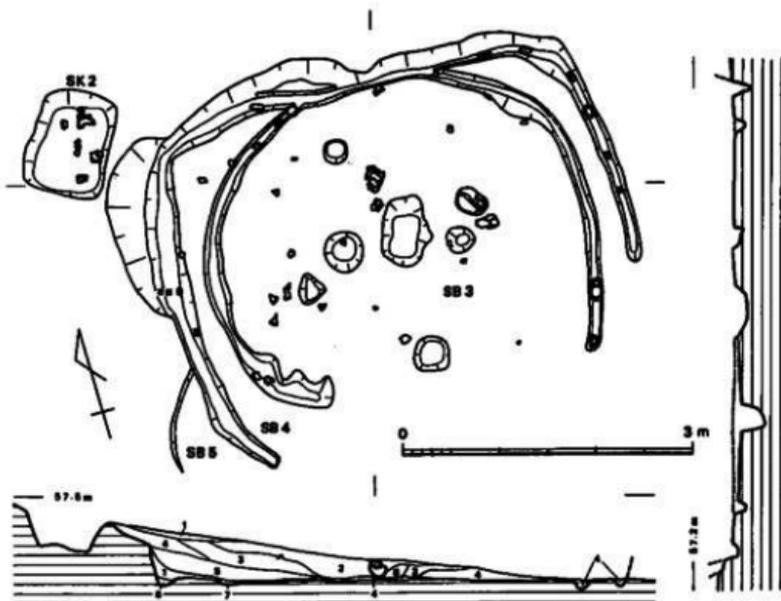
8図7), 変形土器(1, 3, 4), 底部(5, 6)及び太形蛤刃石斧(第10図1), 石錘(3), 石鏃(4), スタレイパー(5)のほか鉄斧と思われる板状鉄製品(6)が, SB4南辺部の貼床レベルより若干押して出土している。しかし, 南北セクションの土層観察では, この南辺斜面ぎわの部分が擾乱をうけている事から混入の可能性もある。

高坏形土器口縁, 変形土器口縁の退化凹縁及び胴部内面寛削りの位置などから弥生中期末に比定されるが, 同じく第8図2の変形土器に示される様に若干の時間差の考えられるものも含まれ, 中期末のきわめて短期間のうちに拡張を行ったと考えられよう。

当住居跡の西側には袋状土塚のSK1と長方形のプランのSK2が近接するが, SK1からは時期を決定し得る遺物を欠き, SK2は弥生後期前半でも新相を示す遺物が出土し時期的な隔りをもつ。

#### SB6(第5図)

A9, 10区の尾根状部の傾斜変換部に, SB4に東接して位置する。遺構面の遺存は厚く, 南北両斜面及び東半部を開墾に伴う道もしくは溝により壊され, 西辺のみを残す。それによると, 壁高は床面から約40cmを測り, 側溝施設は持たない。壁自体も整然とした掘り込みではな

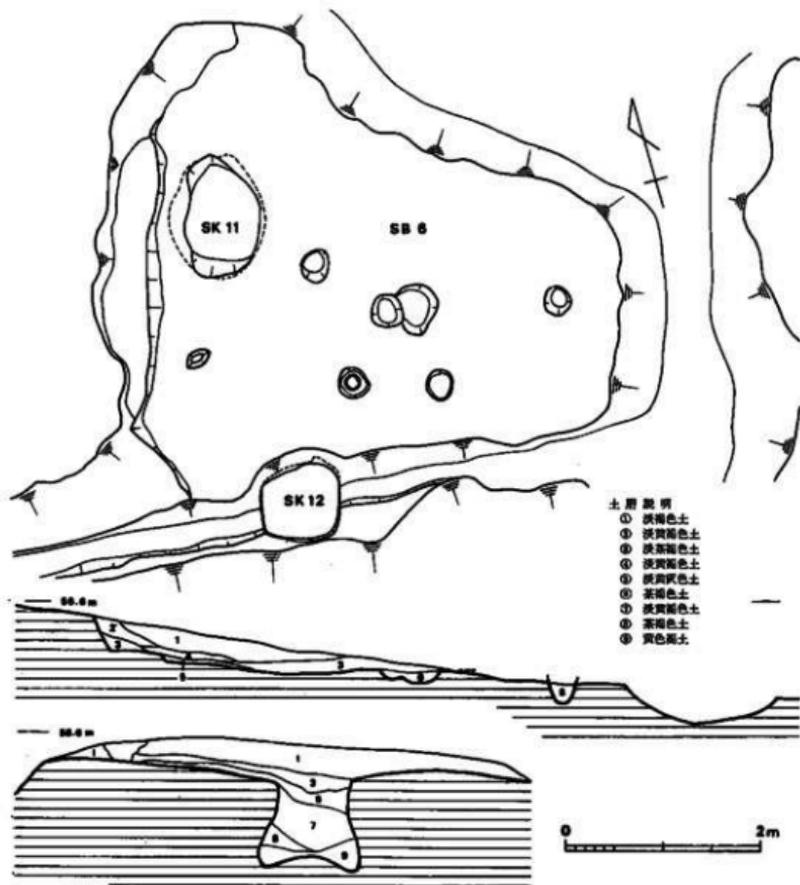


第4図 石鏃推定遺跡SB3~5実測図(1:60)

1. 淡黄褐色土 2. 赤茶褐色土 3. 茶褐色土 4. 暗茶褐色土 5. 黄褐色土
6. 淡黄灰褐色土 7. 淡灰褐色土 8. 暗赤茶褐色土

く、壁に沿って長さ約5m、幅50cm、高さ10cm程の段をもつ。床面は東側に緩く傾斜し、現状ではピット7、袋状土坑2（SK11・12）が検出された。そのうちSK12は閉壘により半壊し、SB6との関係は不明だが、SK11は南一北セクションに示される様にSB6の埋没にあたって同一の土層の流入が観察された。

出土遺物はすべて住居跡覆土中からで、図示し得た変形土器口縁部（第8図8）と高坏形土器脚部（9）の他に変形土器、壺形土器細片が数点出土した。前者は弥生中期末～後期初頭に後者は弥生後期前半新相にそれぞれ比定される。



第5図 石鐘権現遺跡SB6突割図(1:60)

SB7・8・9 (第6図, 図版2b)

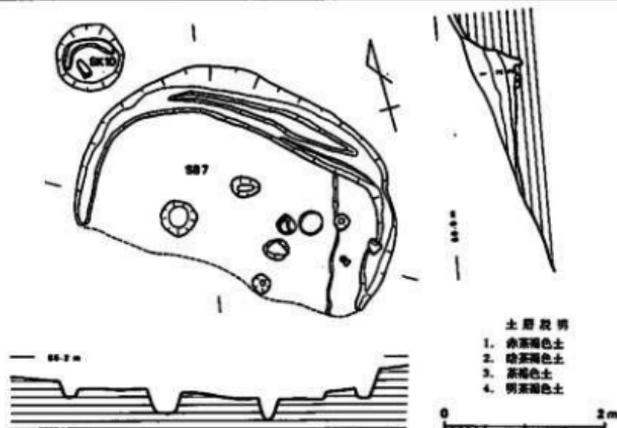
A12区の丘陵南斜面にあり、急斜面のため南半部を欠く。周溝の切り合いから3回の重複、拡張がみられる。主軸方位をN52°Wにもち、長軸約4mの隅丸方形を呈し、SB7北辺では壁高約65cmを測る。周溝幅は約20cm、深さ10cm前後で、3軒とも東西両辺を共有するが北辺でSB9→SB8→SB7と順次拡張されている。床面は水平面が現存部の約1/3程度しか残されており、柱穴も対応するものに欠けるが、2柱穴と4柱穴が推定されよう。また床面東半部に約5cm程の段状部分をもつ。

出土遺物は東半部床面に散在、弥生中期末に比定される底部(第8図10)のほかには竈形土器刷部片、鉄鏃(第10図7)及び種子炭化物があるほか自然石1点を東側周溝上面から検出した。近接するSK10からは遺物の出土がなく他の袋状土城とも形態を異にしており、当住居跡との関係は不明だが遺構検出面にSB6の石材と同質の自然石が1点出土している。

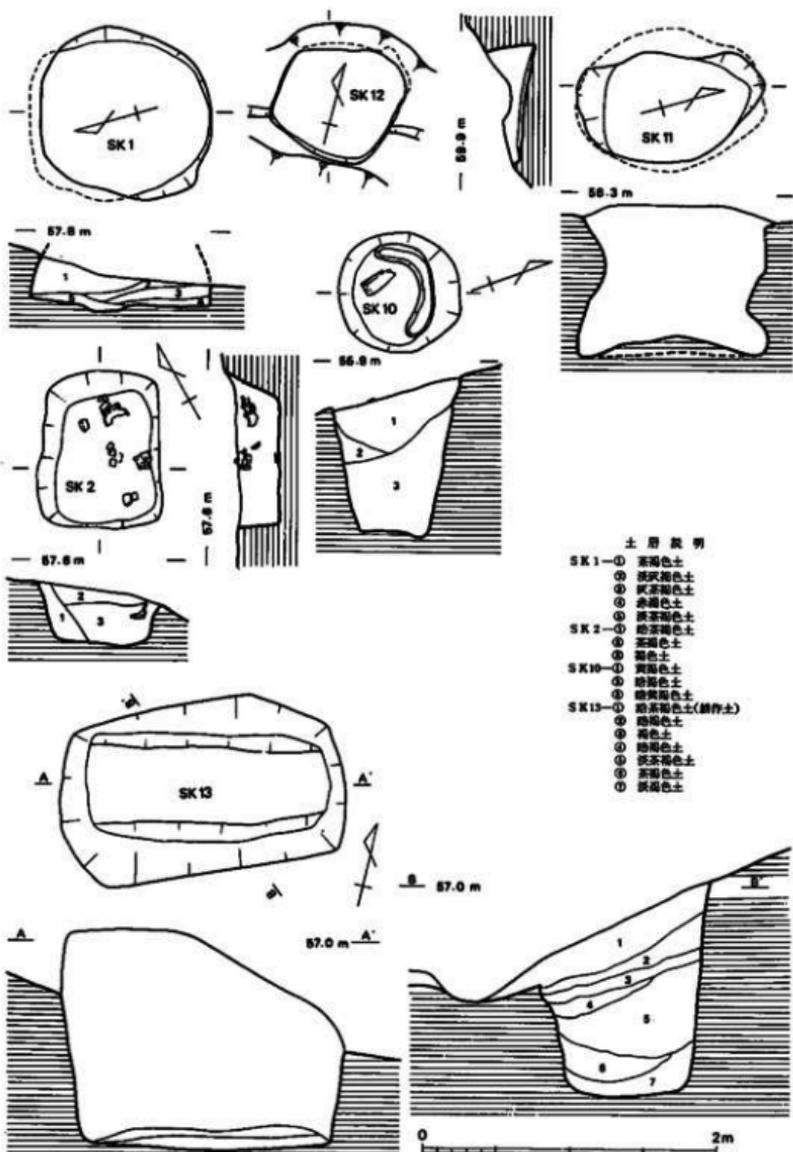
第1表 石籠柵現遺跡土城計測表

(単位はm)

土城№	平面形	掘り方上面 (長さ×幅)	底面 (長さ×幅)	深さ	主軸方位	備 考
SK1	円形	—	1.25×1.12	0.35~	—	弥生土器片出土。
SK12	方形	—	0.8×0.8	0.30	N10°E	底面は南半に高い。隅丸方形。
SK11	不整長方形	0.75×1.3	1.0×1.3	1.0~1.1	N18°E	弥生土器細片出土。
SK2	方形	—	0.63×0.88	0.3~0.4	N29°E	弥生後期の甕形土器出土。
SK10	円形	0.83×0.85	0.45×0.7	0.85~1.1	—	自然産円礫出土。底面に溝あり
SK13	長方形	1.2×1.9	0.5×1.7	0.7~1.5	N77°E	土城墓であろう。



第6図 石籠柵現遺跡SB7・8・9実測図(1:60)

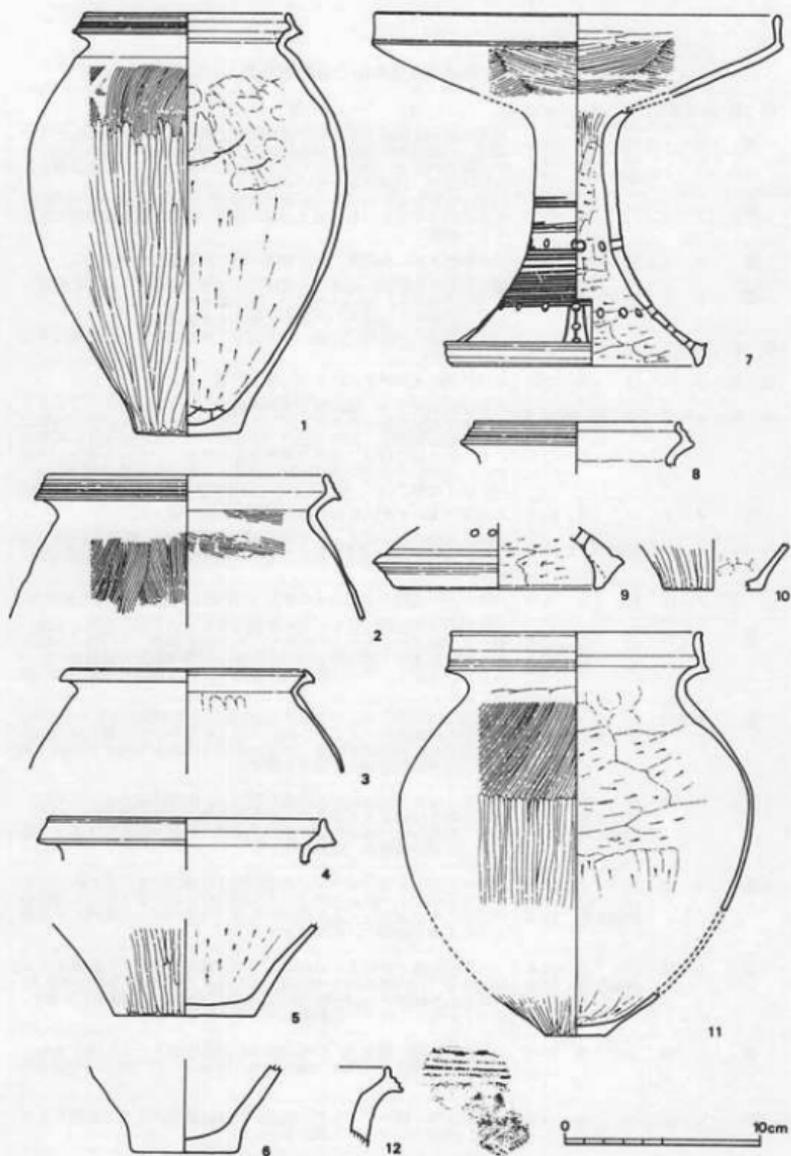


- 土層說明
- SK 1—① 黃褐色土  
 ② 灰褐色土  
 ③ 灰土  
 ④ 赤褐色土  
 ⑤ 灰土  
 ⑥ 灰褐色土  
 ⑦ 灰土
- SK 2—① 灰褐色土  
 ② 灰土  
 ③ 灰褐色土  
 ④ 灰土
- SK 10—① 黃褐色土  
 ② 粉褐色土  
 ③ 粉褐色土  
 ④ 粉褐色土
- SK 13—① 粉褐色土(耕作土)  
 ② 粉褐色土  
 ③ 粉褐色土  
 ④ 粉褐色土  
 ⑤ 灰褐色土  
 ⑥ 灰褐色土  
 ⑦ 灰褐色土

第7圖 石鏟發現遺跡SK-1 SK-2 SK-10~SK-13 實測圖 (1:40)

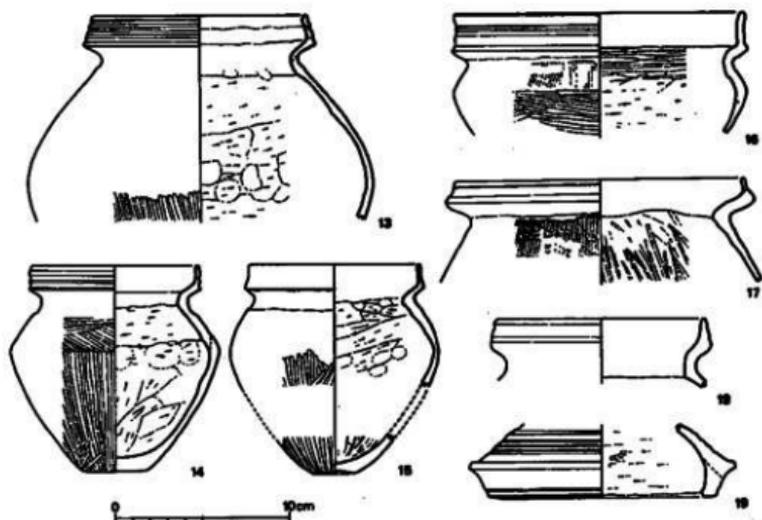
第2表 石鐘椎現遺跡出土土遺物観察表

器種	押印番号	法量 (cm)	形 態・技 法
甕	8-1	器口 胴最大径 高さ 22.3 10.4 16.3	内面寛削りは胴立上半までで肩部は押圧痕の上に刷毛調整しナデで滑す。口縁部内外面は丁寧な横ナデ、外面は頸部から斜め方向のナデ風刷毛調整で、胴最大径から底部にかけて縦方向の丁寧な磨き。底面はナデ。調整の単位はいずれも右から左へ移動。
甕	8-2	口 径 14.4	内面は押圧痕上を斜め方向に刷毛調整、部分的に風雑なナデを施す。外面は頸部下方から単位幅 2cm 毎の細束の刷毛調整を縦方向に左から右へ移動。
甕	8-3	口 径 11.8	内面頸部下半に押圧痕、外面肩部に縦位の刷毛痕をとどめる。
甕	8-4	口 径 24.0	縦く屈曲する頸部からはほぼ水平に外反する口縁部は、端部を肥厚、上方へ拡張する。端面は内傾し、強い横ナデで仕上げられる。くすんだ赤茶褐色、砂粒多いが胎土・焼成とも普通。
底部	8-5	底 径 7.2	内面は縦方向の直削。外面は縦方向の丁寧な磨きで、底部は不定方向のナデ。
底部	8-6	底 径 5.4	全体に押圧成形後ナデによって仕上げられる。
高 杯	8-7	器口 高さ 約18.5 約20.5	円板実形法をとり、脚柱部上端部内面にしぼり目を残すが、かなり上方まで右から左への磨削りが行なわれている。杯受け部内外面は丁寧な弧状磨き、脚部外面は丁寧な横ナデで脚柱部中位から脚端にわたり 3段に分けて細束の磨削効果が残る。いずれも右一左へ掃かれ、3段目の上下に径 5mm 程の円孔がそれぞれ 9孔、16孔配され、16孔は 4分割されて、縦位の円孔。磨削効果 3本により装飾される。
甕	8-8	口 径 10.4	口頸部下方はナデ、口縁部は内外面とも強い横ナデ。
高 杯	8-9	脚端径 約10.0	端面には強い横ナデによって凹線状のものが見える。脚端部に径 0.4cm の円孔 2が残る。内面は右から左への横方向の磨削り、外面は強い横ナデ。
底部	8-10	底 径 5.0	内面は押圧成形の上を弱くの磨削り、外面は縦方向の丁寧な磨き。
甕	8-11	器口 胴 高さ 22.0 12.8 18.0	内面頸部下方は押圧痕をとどめ粗雑な横ナデ。口縁は内外とも強い横ナデ。頸部から斜め方向にナデぎみの刷毛調整、その後胴最大径から底部まで丁寧な縦方向の磨き。内面は胴最大径前後に左から右への磨削り、下半は縦方向の磨削り、外面刷毛目は左一右へ移動。
甕	9-13	口 径 12.4 胴 径 約20.0	口縁部は内外面とも丁寧な横ナデ、内面寛削りは頸部直下まで至り、縁縁部に押圧痕をとどめる。磨削りは主に左から右の横方向で胴最大径部分には押圧痕が残る。外面は丁寧な不定方向のナデの後、胴最大径以下に縦方向の磨削りを施す。
小型甕	9-14	器口 胴最大径 高さ 11.9 9.5 11.9	口端面には 2条の退化した凹線を残す。底部は縁のとれた平底。内面寛削りは頸部まで至り、上半を横方向、下半を縦方向に磨く。外面は肩部を横、斜め方向の磨削りした後、胴最大径から底部まで縦方向の丁寧な磨き。底面はナデ。
小型甕	9-15	器口 胴最大径 高さ 12.0 9.7 11.9	口縁は内外とも強い横ナデ。内面寛削りは頸部まで行なわれ、上半を左下から右上へ斜め方向、下半を縦方向に削り最大径位に押圧痕が残る。外面肩部を入念な横ナデの後、胴最大径から底部にかけて縦方向の丁寧な磨き。底面はナデ。
鉢	9-16	口 径 16.8 胴最大径 17.0	くの字状に縦く外反する口縁部は、やや外傾気味に直立し拡張する口端面をもつ。内面磨削りは頸部下方で止り、頸部は横方向の磨削り。口端面内外は横ナデ。外面は肩部に横方向の広い目の刷毛目を残し、その上を弱く横ナデ。胴最大径下半は弧状磨き。
甕	9-17	口 径 16.5	口縁内外は強い横ナデ。内面寛削りは頸部でシャープな線をもち、斜め方向の削り工具痕が全面に残る。外面はナデつけ気味の刷毛目の上を横ナデ。
甕	9-18	口 径 13.8	口端面は強い横ナデで上方に拡張。内面は頸部直下まで磨削りを行ない、内面にシャープな線をもつ。
高 杯	9-19	脚端径 13.2	内面は右から左方向へ磨削り。

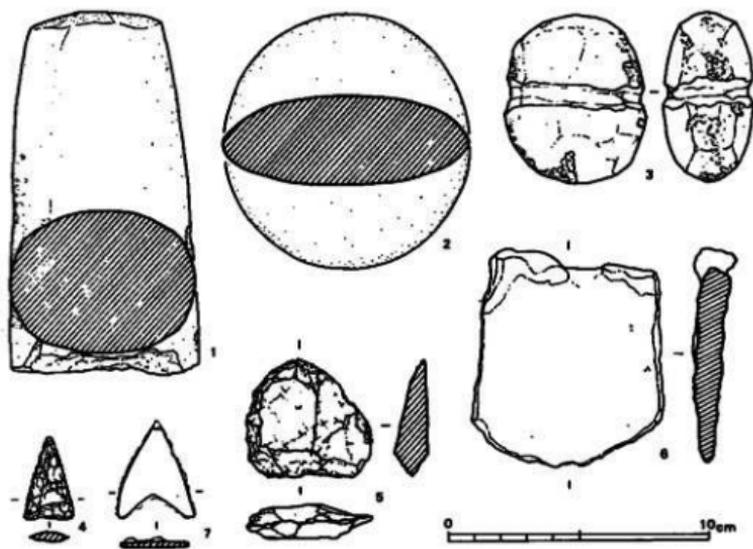


第8圖 石鏡堆現遺跡出土石器實測圖 (1) (1:3)

SB4: 1~7 SB6: 8, 9 SB7: 10 SK2: 11, 12



第9圖 石鋪堆現出土器夾割圖 (註) (1:3) 3区13~17, 7区:18·19



第10圖 石鋪堆現遺跡出土石器·鉄器夾割圖 (1:2, 7註1:1) SB4:1~6, SB覆土:7

## 小 結

石鐘櫛遺跡の位置する駅家町の芦田川右岸地域は高増山などの山麓北斜面から派生する多数の低丘陵と、複雑に入り組む支谷、小河川によって狭小な沖積平野が形成されている。当遺跡に居住した集団も、このような地形を利用し、谷水田による稲作経営を生産基盤とした比較的小規模な単位であった事が窺えよう。袋状土塚にみられる貯蔵形態のあり方、SB4・7をもって一時とだえる住居痕跡等、多くの問題が残されようが、丘陵全域に開墾に伴う削平が著しく、ここでは遺構についての検討は控え、出土遺物の編年の位置づけを考えてみたい。

先に述べた様に出土遺物は弥生時代中期末と後期前半に2分され、前者はSB4・7に、後者はSK2、土器溜り等にわかれる。SB4・7は共に同一地点で重複、拡張する住居跡の最も新しいもので、甕形土器では口縁端は内傾気味に上方へ拡張、退化凹線を廻らせ、内面寛削りも胴最大径上方で止まる。ナデ肩で、底部付近での強い内湾も消える。高坏形土器は脚部に多角化した寛描き沈線を描き、坏部口縁は浅く立上り端部は丸く終える。神辺御領遺跡国鉄井原線建設地内A地点SD21出土土器<sup>(1)</sup>と同一の様相を示し、弥生時代中期末に比定される。次のSK2、土器溜りに代表されるグループは、所謂「神谷川式」に特徴的とされる胴の強く張る器種を含み、甕形土器は口縁端を横ナデ仕上げするものと、退化した凹線を廻らすもの<sup>(2)</sup>に2分されるが、これが時間的な差を示すものとはいえない。胴部最大径を上位にもつため肩が張り、底部付近で外湾気味となる。平底もしくは若干上げ底気味を呈す。内面寛削りは肩部上半までのものが多く、頸部に及ぶものもある。

高坏形土器は脚根部で緩く外湾し、外面及び脚端面は強い横ナデで仕上げられ、端部下方への拡張が強い。内面は挟り気味のラフな寛削りを行なう。その他、精選された胎土で、丁寧な寛磨きの施された小型甕形土器、鉢形土器があり、総じて口縁部は直立し横ナデで仕上げられるものが多い。大宮遺跡SK71に後続し、神辺御領遺跡国鉄井原線建設地内E地点SX11に先行する様相を示す。弥生時代後期前半の新相段階に比定される。

弥生時代前期以降、その農業生産力を背景に中核的地域を形成していく神辺平野に対し、その周辺地域における世帯共同体の一端を示すものといえようが、泉宮駅家団地造成地内遺跡群、神谷川遺跡など今だ類例に乏しく、今後周辺の沖積平野部での生産・生活跡の調査と後期「神谷川式」の編年が急がれよう。(三枝)

注)

(1) 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡—国鉄井原線建設にかかる発掘調査報告—』1981

(2) 豊元圃、甘粕隆「備後神谷川の弥生式遺跡」『吉備考古』第75号・1948。村上正名「神谷川弥生式遺跡」『広島県文化財調査報告』第2集 1962。潮見浩「山陽地方」『弥生式土器集成』本編 1964。脇坂光彦、小郡隆「芦品郡新市町神谷川遺跡の資料」『地歴部誌』第4号 1976。

(3) 備後南部地域では中期末以来の退化した凹線の手法は後期中葉もしくはそれ以降まで残るものもある。ただこれらは主に強い横ナデで施されるものが多く、ここでは中期末・後期初頭の退化凹線と区別しておく。

(4) 広島県教育委員会『大宮遺跡第4次発掘調査概報』1981

(5) 広島県教育委員会『泉宮駅家団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』1976

## (2) 石籠権現第5号古墳の調査

### 墳丘（第11, 12, 25図・図版4a）

本古墳は狭長な尾根最高所に位置し、地形的制約を受け尾根傾斜を最大限に利用した長さ40m級の前方後円墳である。前方部東側面は地形に沿って急傾斜で下降し、西側面は砂防工事によって削平が進み崖状を呈していた。

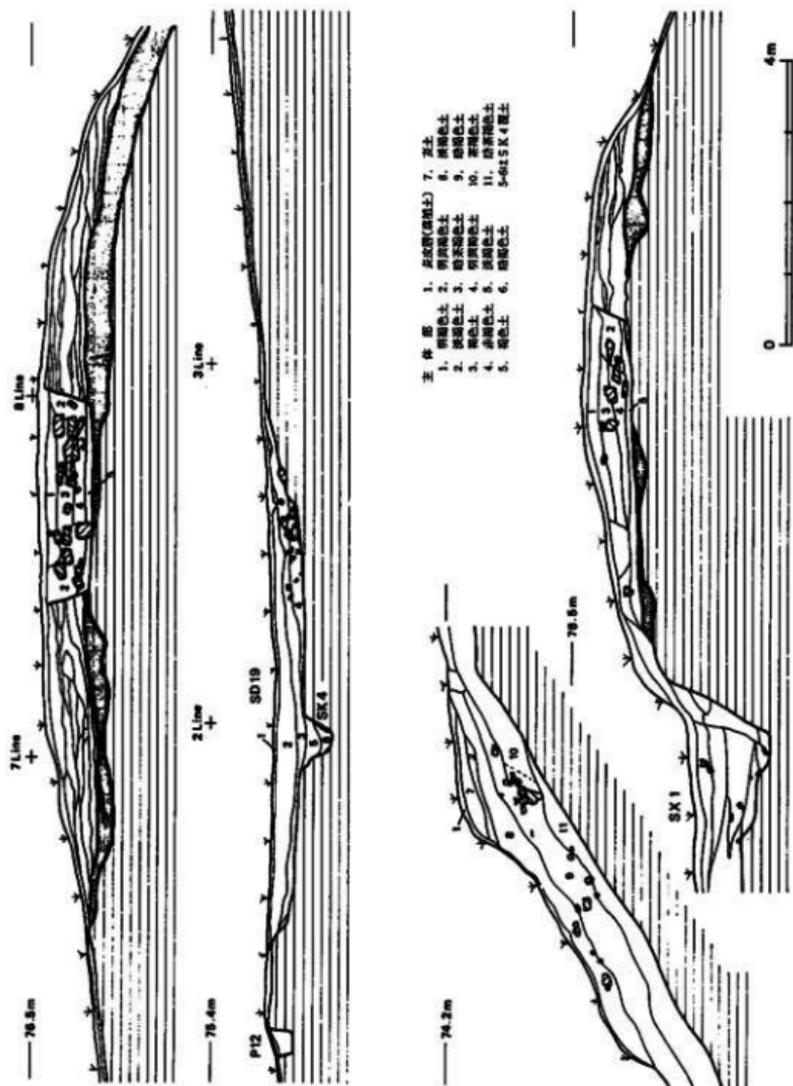
規模は現状で全長37.5m、後円部径22m、前方部幅推定16m、くびれ部幅推定10.5m、後円部高3.5m、前方部高0.5mを計る。墳丘の主軸はN48°Eで後円部を平野側に向けて築造され、前方部前面は深さ0.5m、幅6.5mを測る緩いカーブを描く溝SD19によって区画される。前方部幅は墳丘東斜面に遺存する葎石列から判断すると後円部径に比し若干開き気味ではあるが幅の狭い形状を呈すと考えられる。

葎石は元来墳丘全体に葎かれていたと思われるが、大半は流出により前方部両側面に流土とともに厚く堆積する状態であった。しかし後円部前面及び前方部東側面にかけて部分的ではあるが基底石が廻る状態を確認することができた。葎石は握り拳大から人頭大の亜角礫を使用し、基底部の石は地山または盛土をL字状に削平し、その若干の平坦面に30×40cm大の石を広口積状に一段配列し腰石としている。腰石の上部は遺存状態の良好なもので5段程度小口積にし、後円部中軸線より東側は右から左に、西側は左から右に配される。南側のくびれ部では基底石下端と同レベルで砂利状の小石がテラス状に敷かれている。このテラスは元来基底部に廻っていたと思われるが前述の如く流出が著しく検出できたのはこの箇所のみである。また、後円部に於てはC9区、D9区の74.5mの等高線に沿って列石が検出され、平野部側は少なくとも二段築成をとっていたことが窺われる。また前方部前面に於てはSD19の溝内に浮遊した状態で拳大から人頭大までの石が多く、その範囲は前方部側に集中して検出された。

墳丘盛土は後円部で顕著であり、築造前の地形は元来南から北へ傾斜するものと考えられ、墳頂部は地山を一旦削平しほぼ水平な整地を行い黄褐色砂質土、褐色パイ乱土を互層に盛り版築工法を取っている。東側面では地山の傾斜面に茶褐色粘質土を30～40cm盛り上げている。

### 内部主体（第12図、図版4b）

主体部は後円部墳丘頂部の表土の黒色腐植土直下から検出された。墓坑掘り方は墳丘版築土に掘り込まれたもので、南部を大幅にSX1によって切られ攪乱されていたが、推定長は約4.5mであり、幅約3m、深さは約60cmで、主軸方向はN23°Wである。墓坑掘り方内部は埋土上位より人頭大の角礫が乱雑に密集して検出され、これを除去していくと掘り方中央底面近くに赤色味の強い細砂土が厚さ約10cm、幅約90cm、長さ約170cmの方形の広がりを見せ、そのほぼ北半部を囲んで石が2～3段に赤色土に面を描いて粗雑に積まれていた。遺物はその赤色土の上面から中位にかけて出土した。内行花文鏡は北部の石列近くに鏡面を上にして斜めに出土し鉄剣は一本が石列東辺沿いに、他の一本が北辺近くに位置していた。鉄鏡は赤色土分布範囲南部の東と西にまとまりを見せて出土したが、墓坑掘り方底面南端部からは破片が一点出土している。



第11图 石籠堆第5号古墳墳丘断面土層图 (1:80) 72月は豊地層

玉類は出土を見なかった。

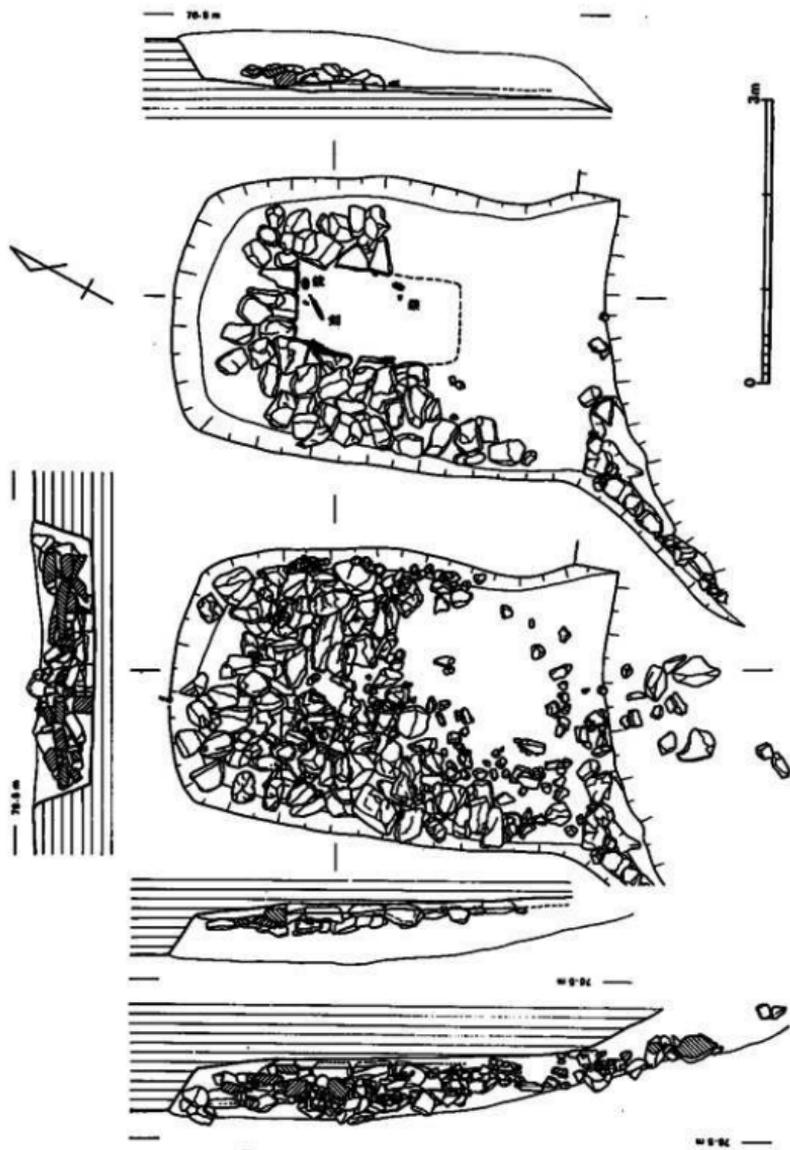
以上の検出状況から主体は木棺であり、墓域掘り方底面中央に置かれ、その周囲に石を三段程度に面を揃えて積み、その上にさらに石を任意に積み上げて一種の蔀棚を形成していたものと推定される。赤色土には朱は含まれてはいないが、木棺の痕跡を示すものであり、その広がりには南部のSX1による擾乱により石列が欠失してしまっているもののある程度本来の木棺の規模を遺存していると思われる。被葬者の頭位は北と考えられる。また大規模な擾乱を受けている部位であり確実ではないが墓域掘り方南隅に版築土を溝状に削り、石をほぼ一列に並べた状態で検出された。墓域排水溝の可能性を強く持つものと考えられる。

#### 土城 (第13・14図、図版6)

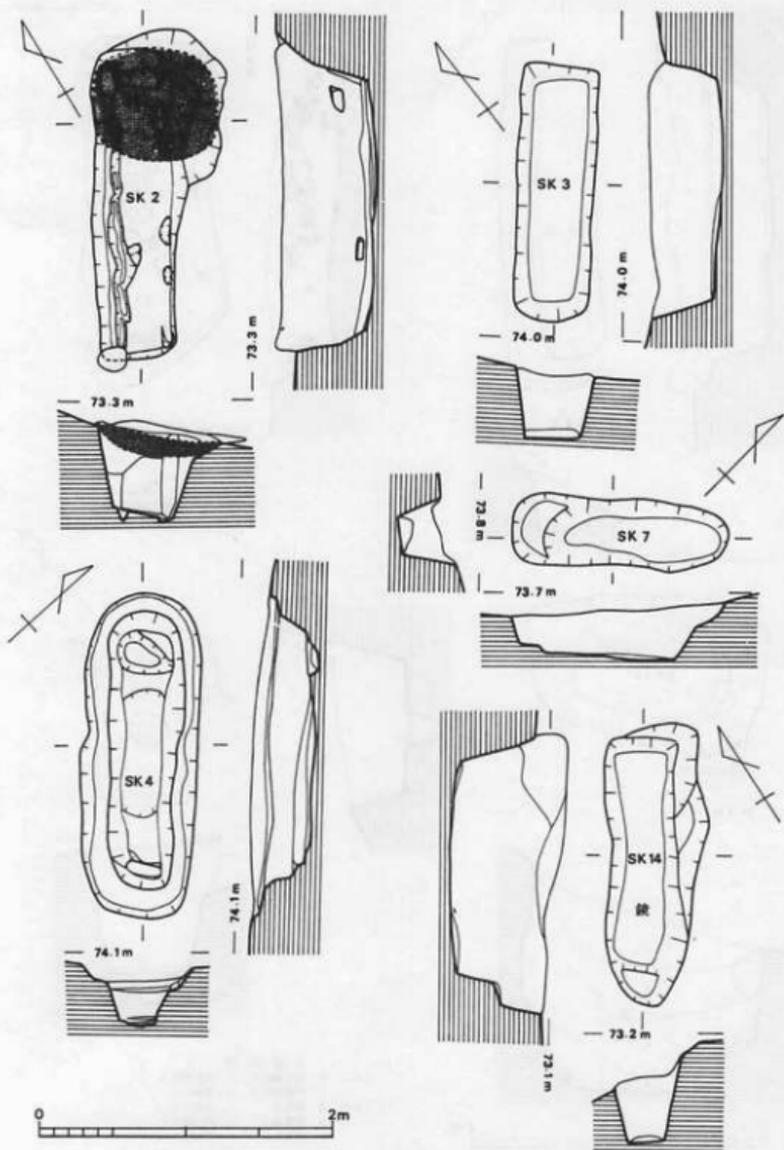
土城は調査区内で総計9基検出した。第5号古墳に強く関係づけられるもの7基と、他の2基に分かれる。前者はSD19、前方部前面の溝に整然と並んだ4基と第5号古墳をとりまくよう配された3基である。SD19からは土城4基の他、焚火跡F17・18が検出され4基の土城の両側に位置している。溝内の土城は溝に直交するものSK2・3・6と平行するものSK4が認められる。また前方部西側面の基定部境界と推定される箇所にはSK14、西側くびれ部と推定される箇所にはSK15、後円部北側の基定部と接する箇所にはSK16を検出した。いずれも木棺を主体としたものと考えられ、大半が同方向に掘られている。後者はSK8・13で古墳の墓域より外れた南斜面に位置する。また前方部溝の背後の平坦部に直径40cm、深さ20cmのビットを3基検出している。これら土城からの出土遺物はSK14から鏡片、SK16から鉄製の小形銅製品、SK13の覆土上層より縄文後期の土器片が出土した。

第3表 石籠検出第5号古墳調査区土城計測表 ( )は推定長

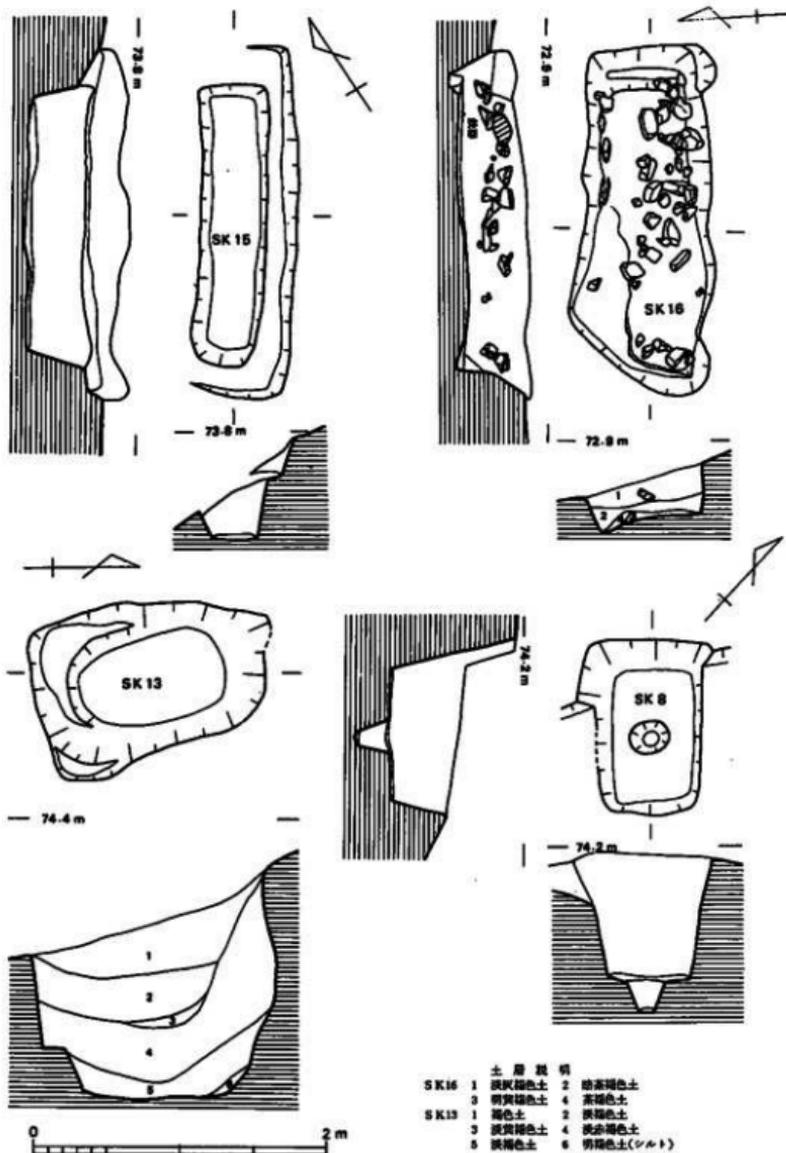
土城番号	平面形	掘り方上面 (長さ×幅)m	底面 (長さ×幅)m	深さ	主軸方位	備考
SK2	長方形	2.17×0.67	1.97×0.45	0.6	N32°E	木棺側板溝あり。礎2個出土。F17と重複。F17が新しい。
SK3	長方形	1.79×0.52	1.55×0.35	0.5	N36°E	端正な長方形プランで、断面は矩形を呈す。
SK4	楕円形	2.27×0.76 1.93×0.47	2.19×0.67 1.71×0.3	0.12 0.28	N45°E	部竹形木棺。城底面U字状を呈す。二重土城。
SK7	楕円形	1.47×0.50	1.06×0.3	0.40	N47°W	二重土城か。
SK8	長方形	(1.22)×0.88	0.92×0.56	0.85		中央にビットあり。貯蔵穴か。
SK13	楕円形	1.60×1.05	1.00×0.58	1.65		上層より縄文後期の土器片出土。
SK14	長方形	— 1.87×0.45	— 1.47×0.25	(0.15) 0.4	N31°E	二重土城。城底面より2cm浮いて飛禽鏡片出土。
SK15	長方形	2.45×— 1.98×0.46	2.39×— 1.78×0.3	0.29 0.40	N32°E	二重土城。
SK16	長方形	2.40×0.85	1.07×0.8	0.43	N83°W	南小口部に小口板の裏込め石あり。第5号墳の葎石流入。鉄器出土。



第12圖 石鐘惟現第5号古墳主体部実測図 (1:60)



第138图 石髓椁现第5号古墳調査区土坑実測図 1 (1:40)



第14图 石籠検視第5号古墳調査区土坑実測図 2 (1:40)



## 出土遺物 (第16, 17, 18図)

### 土器 (第16図)

縄文土器 (4) 口縁部片で端部には刻目を施し、外面に2条の沈線を加えている。

土師器 (1~3) 1は口径12.4cm, 器高7.4cmの埴形土器である。体部は丸く、頸部はくの字状に折れて口縁部は内湾気味に伸びている。内外面とも笠磨きが顕著である。SK16付近出土。2は高坏片で内面は横位方向の寛削りを施し、外面は縦位に丁寧に寛磨きしている。主体部埋土出土。3は鼓形器台もしくは二重口縁の臺で、口径10.3cm, 現高3.7cmを計る。内面は横・斜位に寛磨し、外面は風化が顕著であるが、部分的に横ナデ調整が認められる。

F6・7区出土。

須恵器 (5~9) 5は口径10.4cmの坏蓋である。口縁部外面に1条の沈線を加えている。内面には突出気味の断面三角形のかえりがついている。内外面とも水引き調整である。6~8は口径6.1~9.7cm, 器高3.3~3.7cmの坏身である。坏底部はほぼ平坦となっており口縁部は斜上方に直線的に延ばし端部を丸く納めている。底部外面は寛切り後、部分的にナデ調整を加えている。他の部分は水引き調整である。9は口径20.8cm, 器高39.8cmである。体部は球形によく張り、口縁端部は先端を外方に折曲げて拡張させている。口縁部内外面は水引き調整を施し、体部外面は糜状の打圧痕を内面は同心円状打圧痕を施す。須恵器は全てF6, 7区出土。

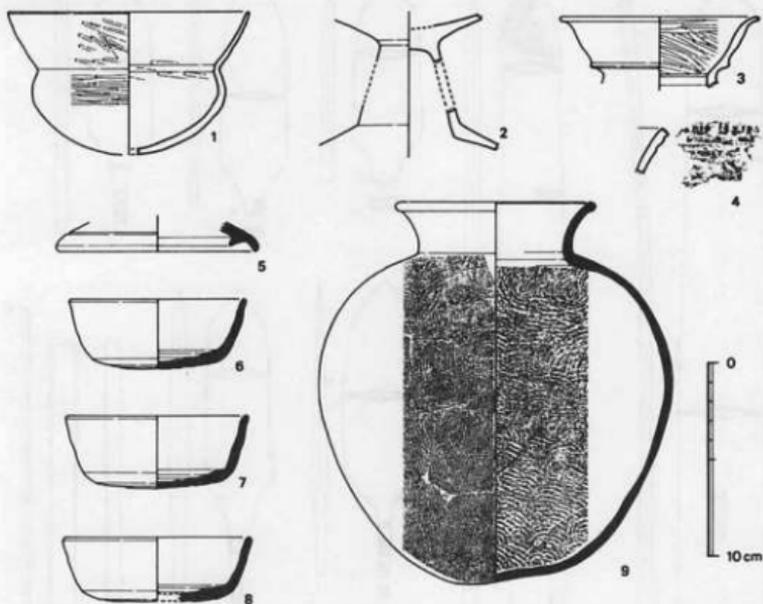
### 鏡 (第17図)

内行花文鏡(1) 平縁の七葉鏡で鏡面径11.4cm, 縁部の厚さ3mmを計る中型品である。内区外方は直行櫛歯文帯を施し、内方は二重の圓線を廻らし無文帯とする。内区には隔出した七弁の花文を配し、一弁がやや歪になっている。円弧間の連結部付近に珠文を配す。鈕は半球形を呈する有圓座で鈕孔幅0.9cm, 高さ1.0cmを計る。銚あがりのあまりよくない仿製鏡である。

飛禽鏡(2) 鏡片であり所謂破鏡である。銚を中心とした六角形状を呈し、最長辺の側面を除き他辺は丁寧に研磨されて光沢をもつ。厚さは最小値で0.9mm, 円座銚の高さは0.6cmを計る。内区は瑞禽の頭部と4乳のうち2つの乳が遺存し半肉彫りである。鈕孔はやや扁し懸垂孔として磨耗したものと思われる。また、最長辺の未研磨は破砕痕であり、埋葬の際新たに割られたものか、舶載鏡で銚あがりのよい優品である。推定復元径9~10cm。

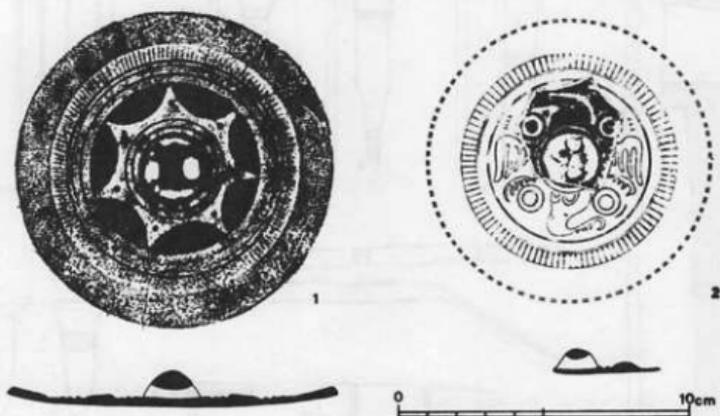
### 鉄器 (第18図)

鉄器は主体部から13点出土し、内訳は剣2, 鐵7, 鏡1, 刀子1, 筒形鉄器1, 壘形鉄器1である。剣1は全長397mm, 茎長110mmを測る。身は幅25~32mmで厚さ4mmである。先端部には若干張がある。柄木の痕跡は身の部分まで入り込んでいる。目釘穴は1つである。剣2は全長317mm, 茎長105mmを測る。身は幅20~24mmで厚さ5~6mmである。先端部の張は1に比べ小さく狭峰となっている。目釘穴は2つある。1・2共全長に対する茎の長さは比較的長く(28~33%), いずれも身部に布の痕跡がみえる。鐵は全て有茎でA, 広根両丸造柳葉式(3~7)と



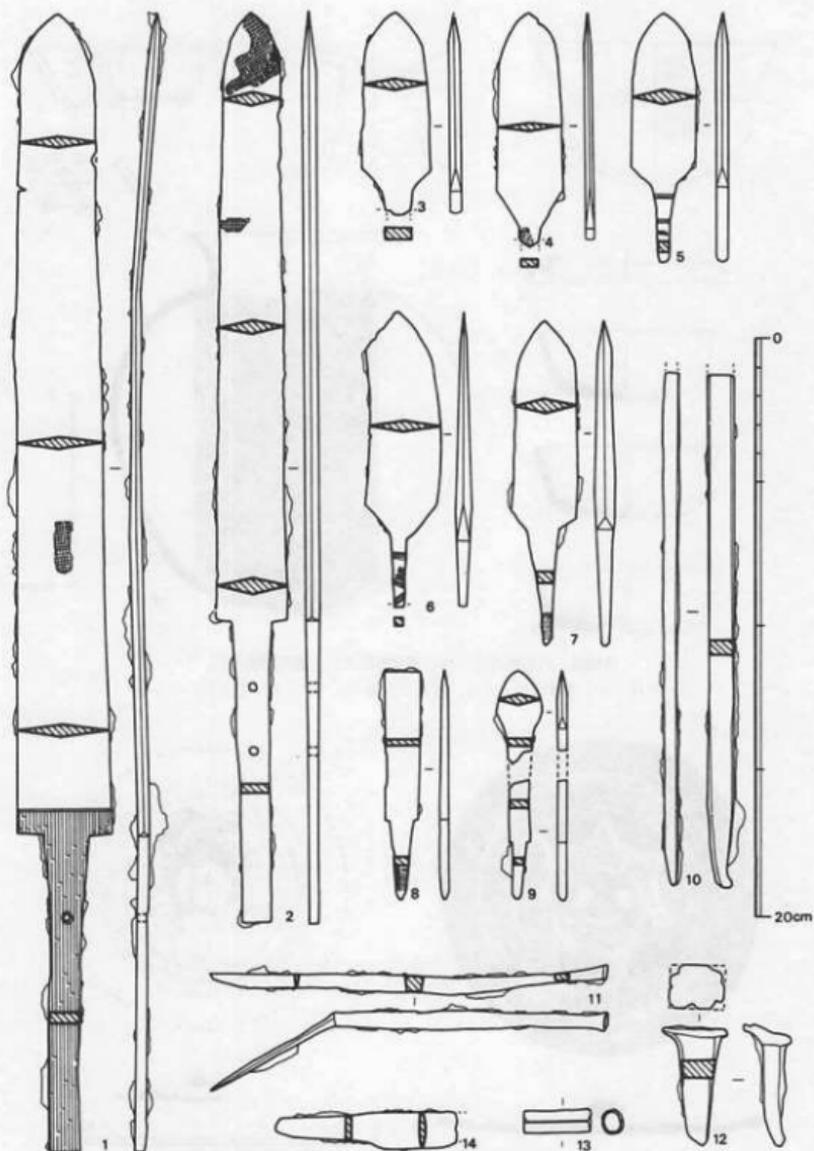
第16图 石鐘権現第5号古墳調査区出土土器実測図(1:3)

B-9区: 1, 主体部覆土: 2, SK13上层: 4, F-6・7区3, 5~8



第17图 石鐘権現第5号古墳出土鏡実測図(1:2)

1, 主体部出土 2, SK14出土(復元推定)



第188图 石鏡権現第5号古墳主体部出土鉄器実測图(1:2)  
(14はSK16出土)

B方頭細根斧筋式(8)とC筈被棒葉式(9)の3種がある。Aの全長は8.8~11.4cm、幅は約22mmで先端部には若干張を持つ。Bは厚さ2mmで筈被はない。Cは折損していて全長及び筈被の長さは不明。10は鉤で先端部は欠失している現長17.8cm、幅0.9cm、厚0.5cmで尾部は幅が狭くなり鉤状になっている。11は刀子で現全長14.4mmを計る。身は幅0.5cm、厚さ0.2cm、茎は幅、厚さ共0.6cmで断面は方形に近い部分と楕円形の部分とがある。身の長さに対して茎が長い(約2倍)12は出土状態からみて刀子に付属すると考えられる資金具状のもので、厚さ1mmの板金を丸めたものである。13は盤状の鉄器である。全長40mm、幅10mm、厚さ5mmである。頭部は打撃によって23×15mmの面を形成している。重量は1=135.5g, 2=93.9g, 3=16.9g, 4=17.2g, 5=15.9g, 6=21.2g, 7=23.8g, 8=9.9g, 9=2.3g, 10=22.5g, 11=13.8g, 12=2.2g, 13=12.3gである。14はSK16出土で現長7.2cmを計り小形の剣身状を呈す。身は両刃で基部断面は矩形を呈す。

## 小 結

石鎧権現第5号古墳は40m級の前方後円墳で後円部中心よりやや東に偏した位置に中心主体部を構築し、SD19及び前方部西側面、後円部北側面に計7基の埋葬主体をもつ。

墳丘の遺存は決して良好でなかったが、葎石、基底部の列石が部分的に残り、石の積み方は概して粗雑である。くびれ部に於て一部分石敷のテラスが認められたが、尾根幅を最大限利用し、東側面テラス部分は盛土し基底線を隠らせ、地形的制約にもかかわらず最大の規模が得られるよう努力されていることが窺える。また後円部平野側は二段築成気味であり、量感を与えるための工夫がなされる。本来墳丘盛土、前方部前面の高さ等は現状より幾分高いと思われるが、前方部前面の整形はSD19により尾根背後をカットする構築法をとり、墳形は前方部両端部が流出しているが所謂前方部が発達した形態をとるものでない。

中心主体部は堅穴式石室系の積石塚とも言うべきあまり類例のないものであるが、堅穴式石室の構築の際、垂角礎を使用したため、最下段の石は広口積に据えるが天井部に向かって持ち送っていたとすると崩落の際前述の様相を示すとも考えられ検討を要すものと思われる。

中心主体の副葬品は、仿製内行花文鏡1面及び鉄製武器類を主体としている。鉄器の形態は前期古墳の特徴をよく示しその築造年代は5世紀前半期と考えられる。また玉類をもたないことは、被葬者の性格の位置付けに意味あるものと考えられよう。

本古墳の周囲を取り巻くよう配された木棺を主体にもつ土塚はSD19に於ての位置関係が整然としており、中心主体の被葬者との親密さを物語る。西側面、北側面のそれは立地から判断すれば幾分デュアンスの遠い関係であることが窺われるが、墓域としての限界から逸脱しないという観点からすると所謂“兆域”の中であらえることができよう。

出土遺物は主体部以外に、少数であるが土師器が認められ、布留Ⅱ式の範疇に入るものとして扱えられる。またSK14出土の鏡片は飛禽鏡を破鏡として使用したもので、本体の飛禽鏡出土例も少く貴重な資料である。(青山)

## (8) 万念寺遺跡の調査

本調査で検出した遺構には、井戸2・石組4・石列4・覆石の中世墳墓1・集石3がある。その他、谷筋に沿って瓦片を入れた暗渠が構築されている。遺構のほとんどは石材を用いて構築されたもので、井戸を中心として石垣・石組などを築いている。

### SE1

谷の入口近くでSG1によってつくられた平坦面の北側に検出した井戸である。つまりSG1よりゆるやかに傾斜の始まる位置で、自然地形の残された場所と推定しうる。半円形に石組が遺存するが、周囲の石組はすでに崩壊して失われている。残存する石組は板状の石材を用いて縦に並べているが、ほとんど一列で下位には石組は認められない。井桁のためにのみ石組したかと思われ、下位は土盛り、板組かと考えられる。遺構は砂質層の中に埋没し、さらに埋土に覆われ、削平→埋土が繰り返されて廃棄されたものと推定される。

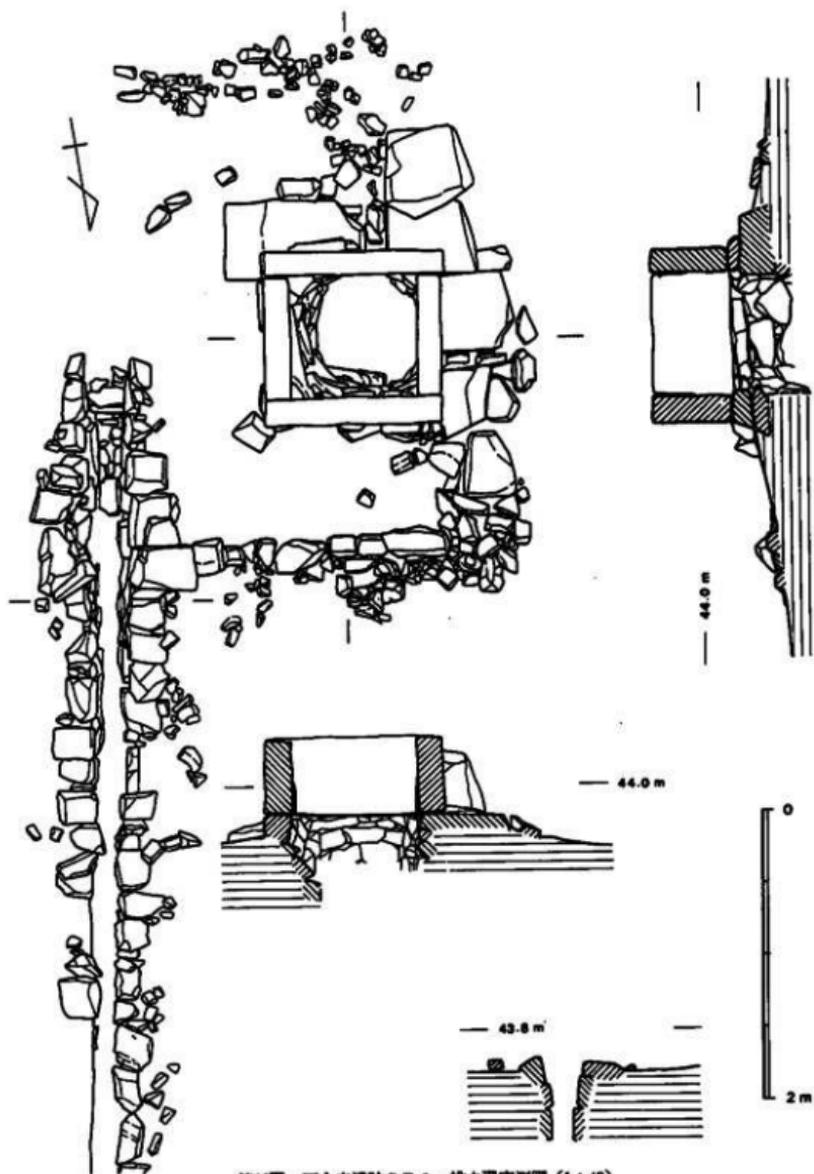
### SE2 (第19図)

遺跡平坦部の中央やや南に位置している。平坦部石組の中心部を占める遺構である。遺構は表面観察時から確認されており近年まで利用されていたものらしいが、その構築は江戸末期をさか上ると考えられるものである。石組の構造は、平面が不整形円形を示し、深さ約11mを計る。井桁周囲は外方に幅80cmほどゆるやかな傾斜をもたせており、端には凹状の周溝を四周させている。溝東よりさらに幅約15~20cm、深さ約60cmの排水溝が設けられる。排水溝は石組でN8°Eに直線的にのび、長さ約9mで遺跡東端谷の入口に向かって大きく屈曲し、谷へ排水するよう構成されている。排水溝の石組上端の一部はすでに失われているが、両壁は全面に自然石の乱積みがなされている。井戸敷外に従い、レベルの下降と石組の粗略化を見られるが、石組は一般的に丁寧な構築で西方に広がる平坦部を利用した区画性が考えられる。つまりこの区画内には礎石列と考えられる3個の石列がある。石は約30cm大の板状の自然石で、約1.8mの等間隔で並んでいる。たゞもう1石は主軸はN78°W直交関係にはなく、伴出関係を明確にし得ない。

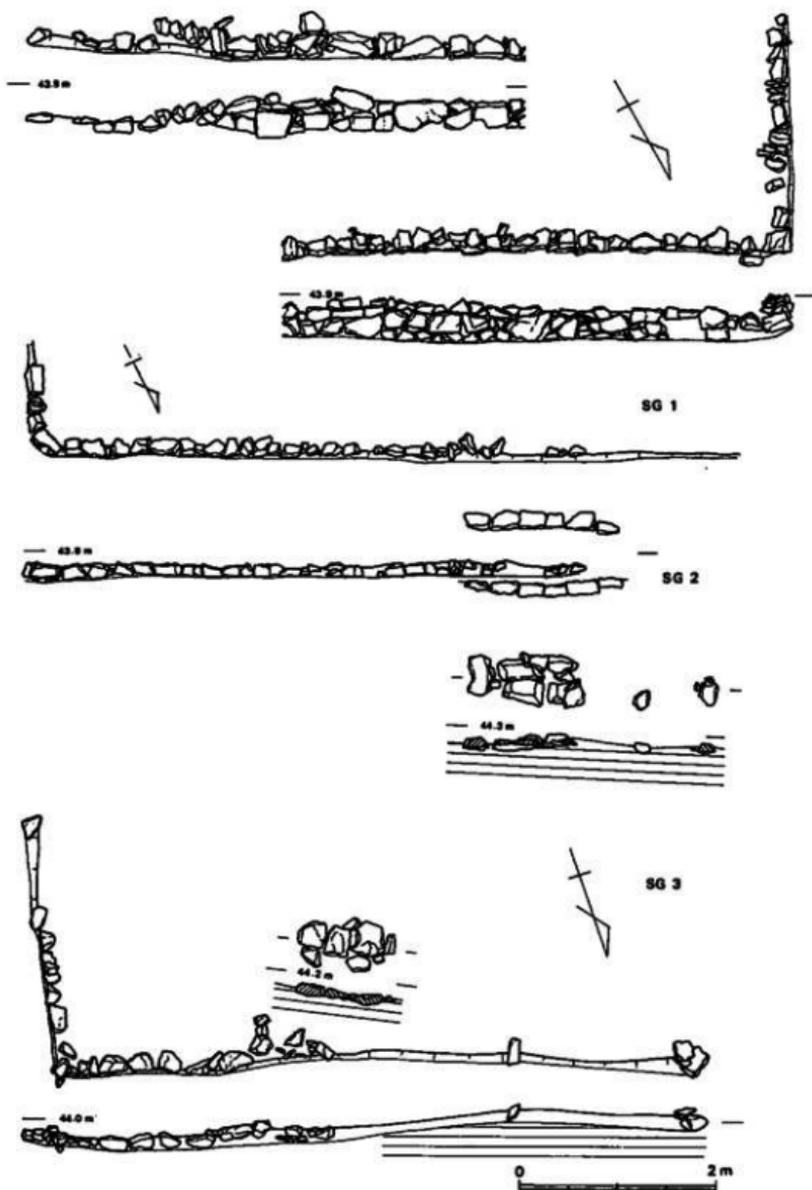
### SG1~4 (第20図)

調査区内で石組遺構4ヶ所を検出した。遺構そのものは調査区より北西に鎮む万念寺山に寄ってゆるやかな斜面上に構築されたもの(SG4)が石列状となり性格をやや異にするが、これを除く3か所(SG1~3)はいずれも谷口寄りの遺跡平坦部に集中して構築され、石垣状に組まれる。

石組遺構は前述の如くSE2配置に規制されるように構築され、削平→埋土に生じた平坦面に残る自然地形の端によって制約があったことを示唆するかのようである。つまり、旧自然地形に沿って構築されたと考えられる。遺構の旧丘陵等高線上に位置すること、また井戸がその中核にあたることは構成上注目される。



第19圖 万念寺遺跡SE 2・排水溝突面図(1:40)



第20圖 万念寺遺跡石組遺構突顯圖 (1:60)

SG1 遺跡東端にあり、その端は現存する崖線で切断される。主軸はN65°Wに向き、東西長10.3m、西方はSG2近くの約1mの所で直角に南へ屈折し約2.5mを加える。南への構築は次第に上りの勾配を示して、SG2との間約1mが通路とされたと考えられる。石組はほぼ水平に築かれ、遺跡東端への傾斜に伴い上部を失っているが、遺存の良好な部分で高さ約40cmを計り、角礫の「乱積み」がなされる。次に、石組で区画される面については柱穴及び礎石は検出しなかった。しかも石組より南へ約7mで地山露出面を観察し、この面を頂点とする緩斜面(約30%)を形成している。また遺構の前面(北側)は埋土による平坦面で、石組の中位までが埋められている。この平坦面上には石列を検出し、石組→前面の埋土→石列と判断される。しかし、石組上部は埋土面より突出しておりその長期的な利用が考えられる。

SG2 SE2を中核とする遺構群中においてSG1やSE2に連続関係をもつ遺構で、東西長約5.5m、東端で屈折して南北長約1m伸びる。東南はSG1との間を埋める通路状のものを補佐する如く平行して南へと築かれ、同様の上りの勾配を示す。屈折部はSG1が直角に対し、これは長方形に近い石材を約45°に置く隅丸状を呈する。構築は一段構成で、部分的に角礫が積まれる。このため、レベルはSG1とも頂部で約10mの低下を見る。遺存は東西長約5.5m、井戸に至る約1.5mは流失したものと推定され、その末端は排水溝に求められ、区画面との段を確認した。この区画面では遺構を検出せず、前面→北側はSG1、本遺構・排水溝に画される埋土平坦面である。遺構には基底下傾斜上に階段状の造り出しが見られる。幅約1.6m、基底より60cmに造り出し、端に長さ約25cmの長方形に近い角礫6個を選んでならべている。

SG3 SE2の西、池との間に造られた遺構で、崩壊が著しく、点存も含めて長さ約7.7m、主軸はN71°Wと推定する。遺構は角礫一段の構築で、東は井戸に連続する。角をもつがわずかに鈍角で、井戸周囲西の外壁として一部欠損しながら長さ約2.8mを測る。

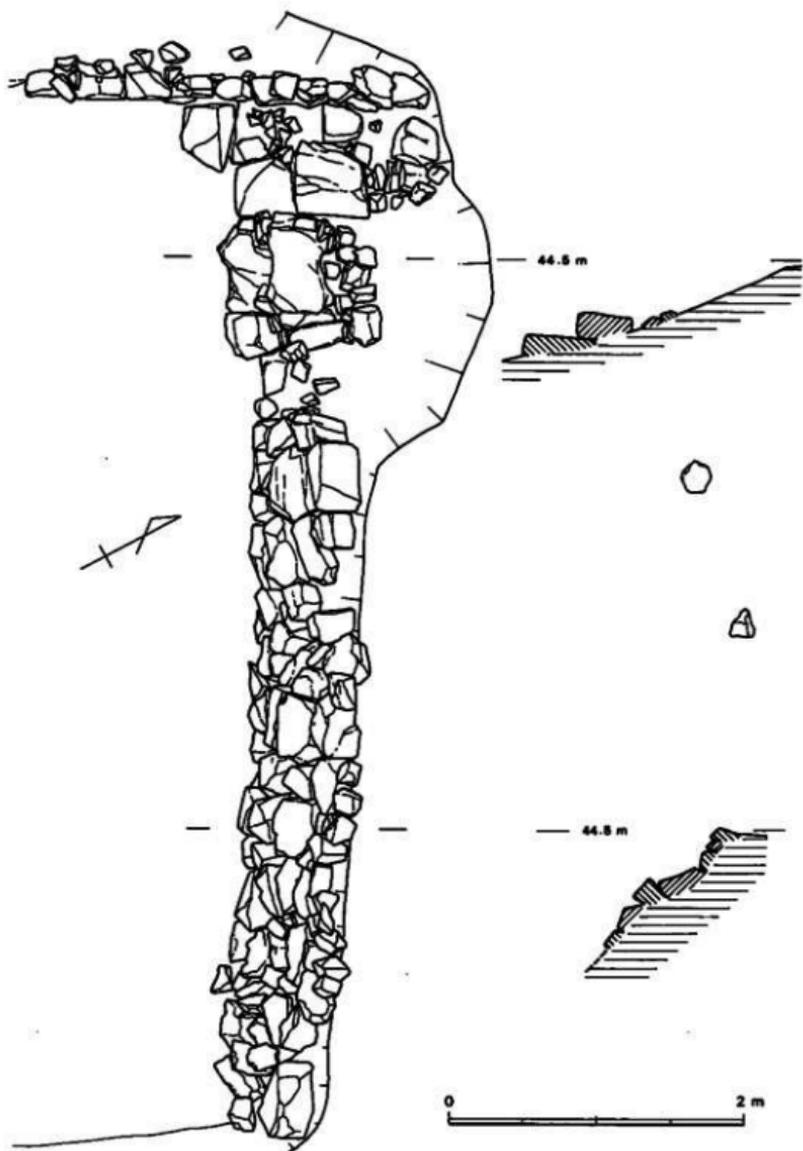
遺構区画内では礎石かと考えられる2ヶ所の集石が検出された。ともに約0.5×1mの長方形と考えられ、径約25~40cm、厚さ10cm前後の板状の自然石4~6個を配す。縦→横→縦→横→横の方向への企画的なもち、数個の小角礫をつめる。しかし集石は2ヶ所のみで、しかも遺構と集石では主軸が5~7°ずれ、詳細な関連は不明である。

SG4 遺構群を離れ万念寺山丘陵近くに検出したもので、構築は一段構成。径20~30cmの角礫を材に、現存長約6mで、東端から3.3mで「コ」の字形の突き出しとなる。

#### 池(第21図)

表面ですべてに観察されたもので、調査区中程、南を遮断する丘陵に沿って位置している。底には現在まで水を湛え、壁の崩壊は著しい。石組の存する北壁の遺存より1辺約7.8mの方形状のプランが推定されるが、南壁は丘陵裾線に制約されたらしく屈曲線を描いている。

石組は北壁全面・西壁の一部に認められ、ともに径約20~50cm大の角礫を乱積みする。北壁は高さ約50~70cmに積まれるがほぼ45°の勾配をもち、西壁から約1mに径約40×60cm、厚さ約20cmの板状の石を選んで横に並べてつくりつけた階段状の特殊構造が見られる。



第21图 万念寺道脉池石组突面图 (1:40)

#### 万念寺山中世墳墓（第22回）

積石の墳墓で、基壇部一辺を除いて南西を失っている。遺構はまず北辺斜面を平坦に削り出し、さらに掘り込んで構築している。掘り込みは深さ約5cm、1辺約2.8mで主軸の方位N61°Wでありわずかに隅丸状を呈している。削り出しに伴う整地かと考えられるがすでに方形プランの意図が見られ、基壇はこれに従って構築されている。基礎にはまず径20cm程度の中型の角礫を選んで配し、後に径5～15cm大の角礫を充填して、さらに長径約40cmに及ぶ大形の角礫をのせて平坦部をつくっている。基礎で最も遺存のよい北角部で掘り込みの内径約15cm程度であることから、他の1辺は約2.5mが本来の範囲と推定される。遺存最高位で約30cm。上部には五輪塔が据えられるもので、現存では隙間に散見する風空輪がみられた。基壇下の埋納施設は検出しなかった。すでに失われたのかとも思われる。また基壇の北東辺、北隅等、長辺の遺存から、本来の正方形に近いプランが推定される。

#### その他の遺構

石列：SG1の前面—北側には、SI1・SI2を検出した。主軸N66°W・N64°Wでほぼ平行し、前者が長さ約15cmの角礫6個の列、後者は長約40cm板状の自然石を最大とする計10数個の列で、両者間の距離は約1.8mを測る。SI2は遺跡東端崖に連結消失する。ともに時期的には層序よりSG1・SE1→SI1・SI2の関係にある。

集石：遺跡内3ヶ所の集石がある。SU1は遺跡ほぼ中央、池の西約11mに検出したもので径5～20cmの小角礫を約60～80cm方形区画に不規則に並べる。

SU2・3は石鋪権現第5号古墳のある丘陵より派生して万念寺谷に向かう丘陵、万念寺山中腹に、やがて急傾斜に移行する緩傾斜地に検出した。

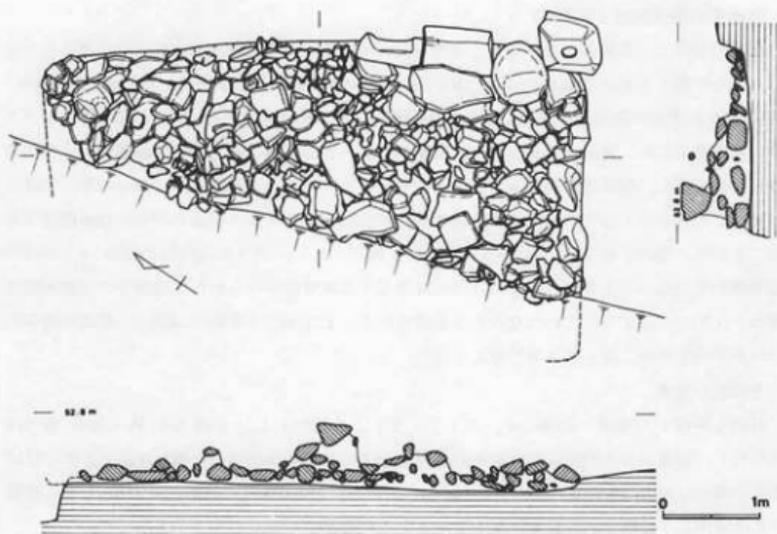
SU2は長径約16～30cmの角礫7個を集石したものである。深さ7～20cmの掘り込みを伴い約60～65cmのやや不整な隅丸方形のプランを有する。底部は皿状をなして、北隅に寄って深さ約10cm、径8×20cmの長楕円形ピット1個が認められる。

SU3は長径約10～30cmの角礫17個を方形に集石する。うち3個はわずかに離れる位置にあるため崩壊の結果とも考えられ、掘り込みも深さ約10～40cmの不整形形状を呈している。ともに性格は不明であるが、掘り込みをもって石蓋土塚墓かと推察される。なおSU2からは須恵器細片が出土した。

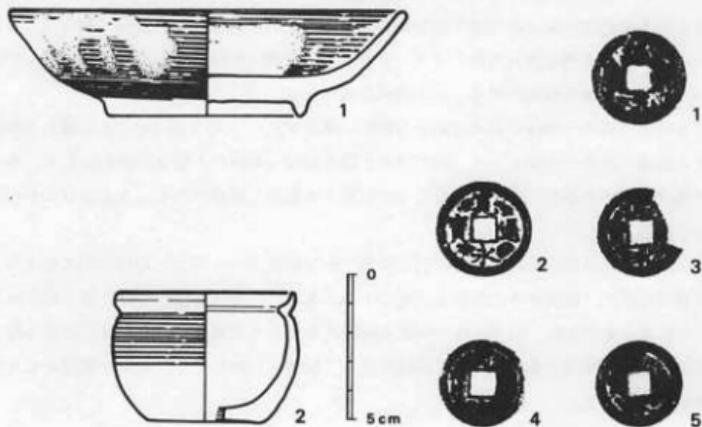
小溝：調査区平坦部から西・北西に至るゆるやかな斜面で、しかも一定の広がりをもつ2本の谷の谷口付近に、暗渠と考えられる2本の小溝がある。いずれも幅約20cm、深さ約20cmの小溝で、中に瓦片を主体に、わずかに小角礫・陶器片を混じって充填している。瓦片に見る限り、平坦部出土瓦片と同様である。方位は谷筋に従って配備されたらしく、直線を基調としながらも屈曲が認められる。

#### 出土遺物（第23・24回）

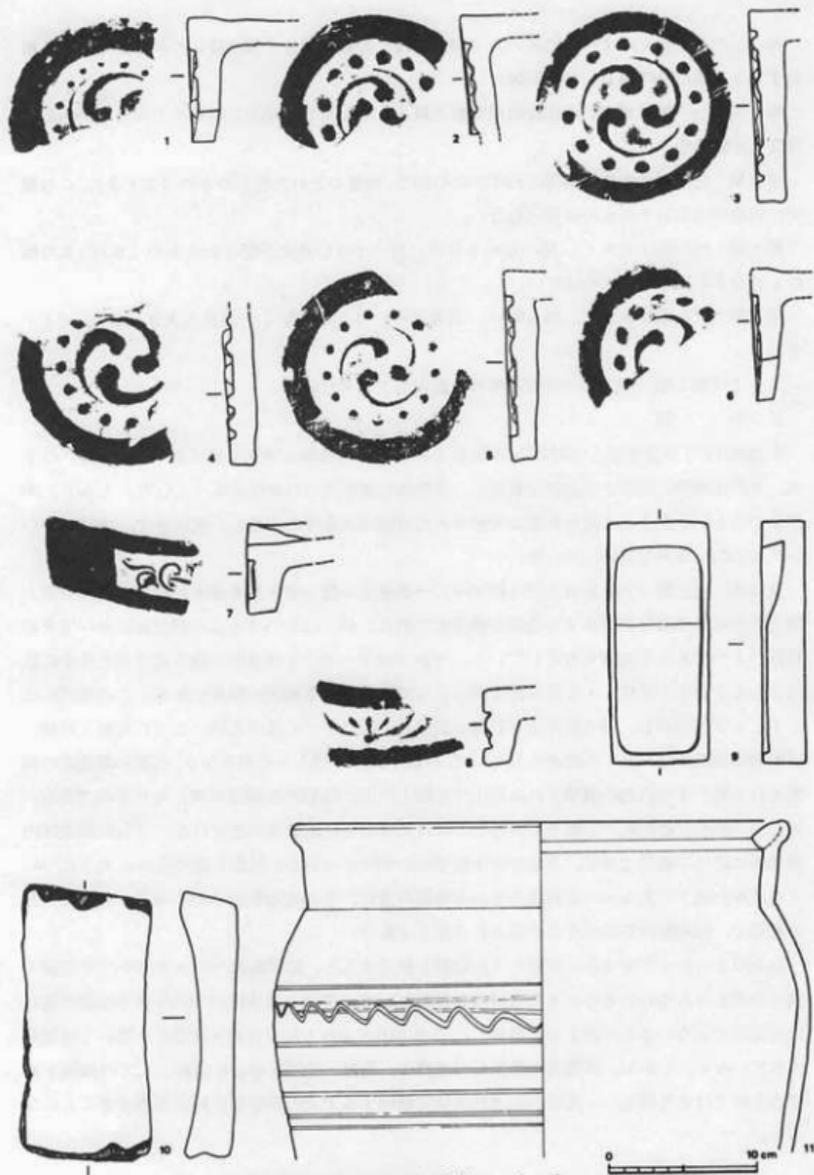
遺物の中で最も多いのは瓦片である。瓦は、鯉瓦・宇瓦・丸瓦・平瓦がそれぞれ発見されて



第22圖 万念寺山中世墳墓実測図 (1:60)



第23圖 万念寺遺跡出土遺物 1



第24圖 万念寺遺跡出土遺物 2 (1:4)

いる。このうち鍔瓦はすべて巴瓦で、一般的には巴の頭が大きく尾の短いのが特徴である。細分すると4類に分け得る。(第24図)

第1類：巴の頭は大きい比較的小さい尾を細く長くしたもので、尾を右巻きにしたものがある。珠文も比較的小さい。

第2類：巴の頭は大きい尾もわずかにのびて、均整のとれた感じのもの(2・3)。この類では遺物中に右巻きのものは見られない。

第3類：巴の頭は大きく、尾の短いもので、径の小さい珠文が配されるもの(5)。この類にも右巻きの巴をもつものはない。

第4類：巴の頭が大きく、尾も短い。右巻きの巴のものではなく、珠文も大きなもの。(4・6)。

ここでは第1類→第4類の時間的推移を仮定しておきたい。

#### Ⅳ 小 結

本遺跡は、「万念寺谷」と呼ばれる伝承もあって、寺院跡と考えられており、「今岡」の字名、平坦な地形、伝承と古記録記載など、寺院跡を裏付ける可能性をもっていた。しかし、中世を中心と少なくとも近世初期まで営まれた遺構は万念寺山古墓しか検出せず、寺院跡について否定的な事実を見出している。

遺跡は、表土層→黄色砂質土層(約30cm)→茶褐色砂質土層を基本層序とし、茶褐色砂質土層上面が石組遺構を代表とする遺構の確認面である。が、はからずもこの確認面においてその根拠の1つである平坦面を否定している。それは削平→埋立を漸次的に繰り返す埋土の中に見出されるもので、SG1・2及び排水溝によって区画される地区に顕著である。この地区にはSI1・2が遺存し、埋土層序より石組→石列の変遷はすでに述べたが、ここに石組と同様、旧地形傾斜面にはSE1が認められていて、石組・井戸→埋土→石列となり、石組の基底面に構築される井戸より石列の構築される埋土平坦面との間に時間的な隔りが考えられるのである。出土の一般的な近世瓦＝石組としてもそこには大きな否定的要素が含まれる。さらに調査区内傾斜面に認める暗渠である。万念寺山中世墳墓の切除から谷筋の拡張が認められる地点についても述べた通りであるが、旧谷底とされる暗渠の遺存、しかも近世をさかのぼることのない瓦の充填で、旧地形の谷筋がそこに示される如くである。

以上のように「万念寺」に留意して旧地形を推定すると、範囲約12～13mであり、平坦面の狭小が考えられるのである。また池以西を谷筋として、やはり調査区内での中世寺院跡の遺存は否定的である。また中世を示す遺物も、万念寺山古墓の1枚の古銭・陶器片を除いては発見されていない。しかし、本調査に検出した遺構は、石組・井戸を中心に遺跡としての価値を減ずるものではあり得ない。近世から近代生活史解明する上での良好な資料を提供することになった。

## V ま と め

石鐘椗遺跡は弥生時代中期最終末から後期前半にかけての集落が存在し、その検出数がそのまま単位となり得ることはないが、非常に短期間のうちに住居の拡張、重複を行ない廃絶したことが窺える。また出土した遺物は、当備南地域でも顕年の空間を埋める良好な一括資料としてとらえられ、今後の土器断年確立の有効な資料となろう。

石鐘椗現第5号古墳は県内でも数少ない前方後円墳の調査として注目される。本古墳の築造年代は古墳の墳形、出土遺物等より5世紀前半でも古い様相を示す。石鐘椗現古墳群中調査されたものは第5号墳及び第6～8号墳である。未調査の第1号古墳は径26mの円墳状を呈すが前方後円墳の可能性もあり注目される。近辺には三角縁神獣鏡を出土した掛迫第6号古墳、三角縁神獣鏡を出土し4世紀代と考えられている潮崎山古墳などの前方後円墳あるいはその可能性をもつものがあり、周辺が弥生時代～古墳時代を通じて生産基盤の高い地域であるとは言え当地域の内的要因から発生したものではなく、何らかの形で畿内地方と直接的に結びつく要因のもとに築造されたことが考えられる。本古墳には付属主体とも言うべき土城が検出されている。その中で鏡片副葬の行なわれたものがあり、鏡片の所有者が首長の周辺に位置する人物であるとすれば<sup>(1)</sup>、土城群の位置関係にも反映したものと解せられよう。鏡は飛禽鏡であり、三国時代の舶載鏡と思われ、飛禽鏡自体も出土例は少ない。<sup>(2)</sup>鏡式からみると本古墳の鏡は平縁式に近いと考えられ、内区外方に鋸歯文を配す三角縁気味のものよりはやや古相を示すと思われる。

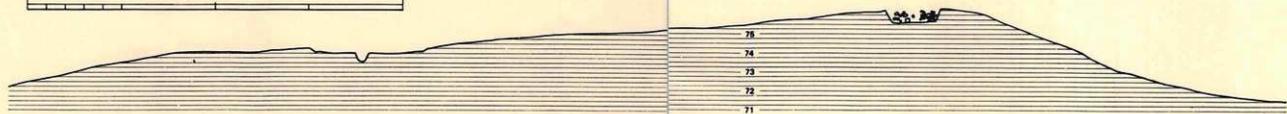
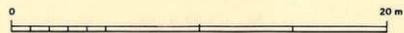
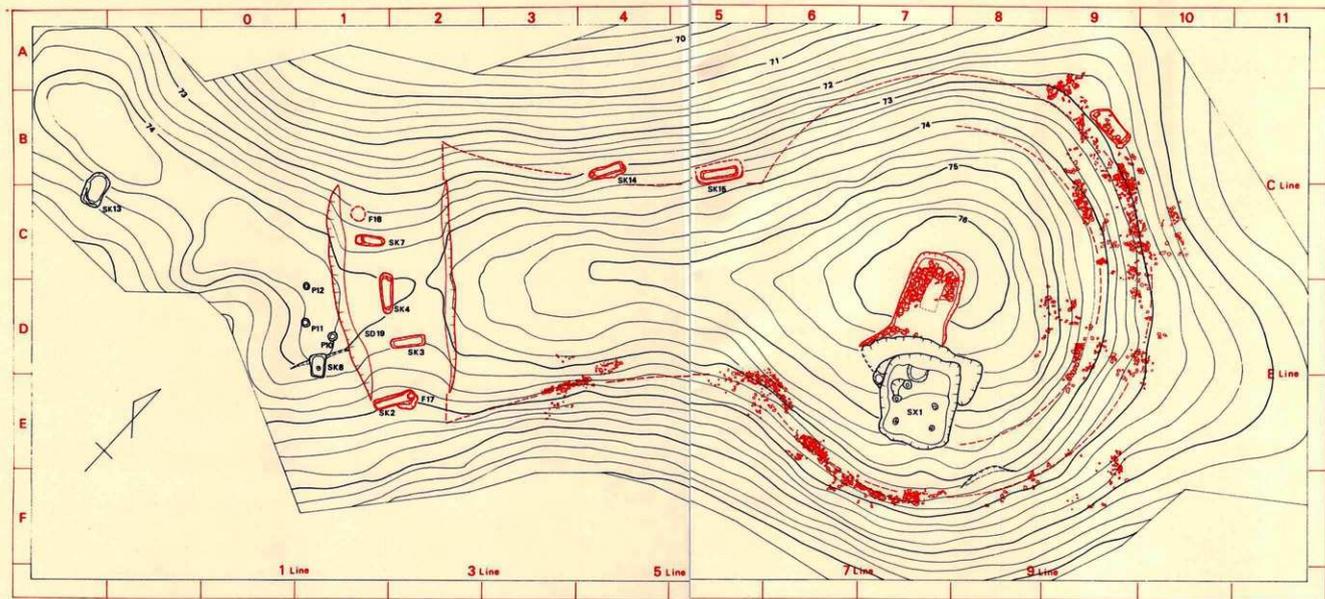
本古墳のように前方後円墳を廻る付属主体の例は兵庫県丸山第1号古墳<sup>(3)</sup>などがあり、今後全面発掘によりその事例も増すと思われる。(青山)

近世にはすでに廃寺となったと伝えられる万念寺跡について、本調査で実証することはできなかった。また遺存する平坦部が、漸次的造成(丘陵一部の削平→埋土)によって造り出されたものであろうことは何度も述べた通りである。井戸や石組遺構や削平面が近世以降のものであることは疑いなく、調査区内から万念寺跡そのものが消失した如くである。しかし、万念寺跡そのものの実在を全面的に否定するものではなく、伝承の中や、地名の中に残る万念寺跡は付近に、あるいは調査区より東に存在しているかもしれない。

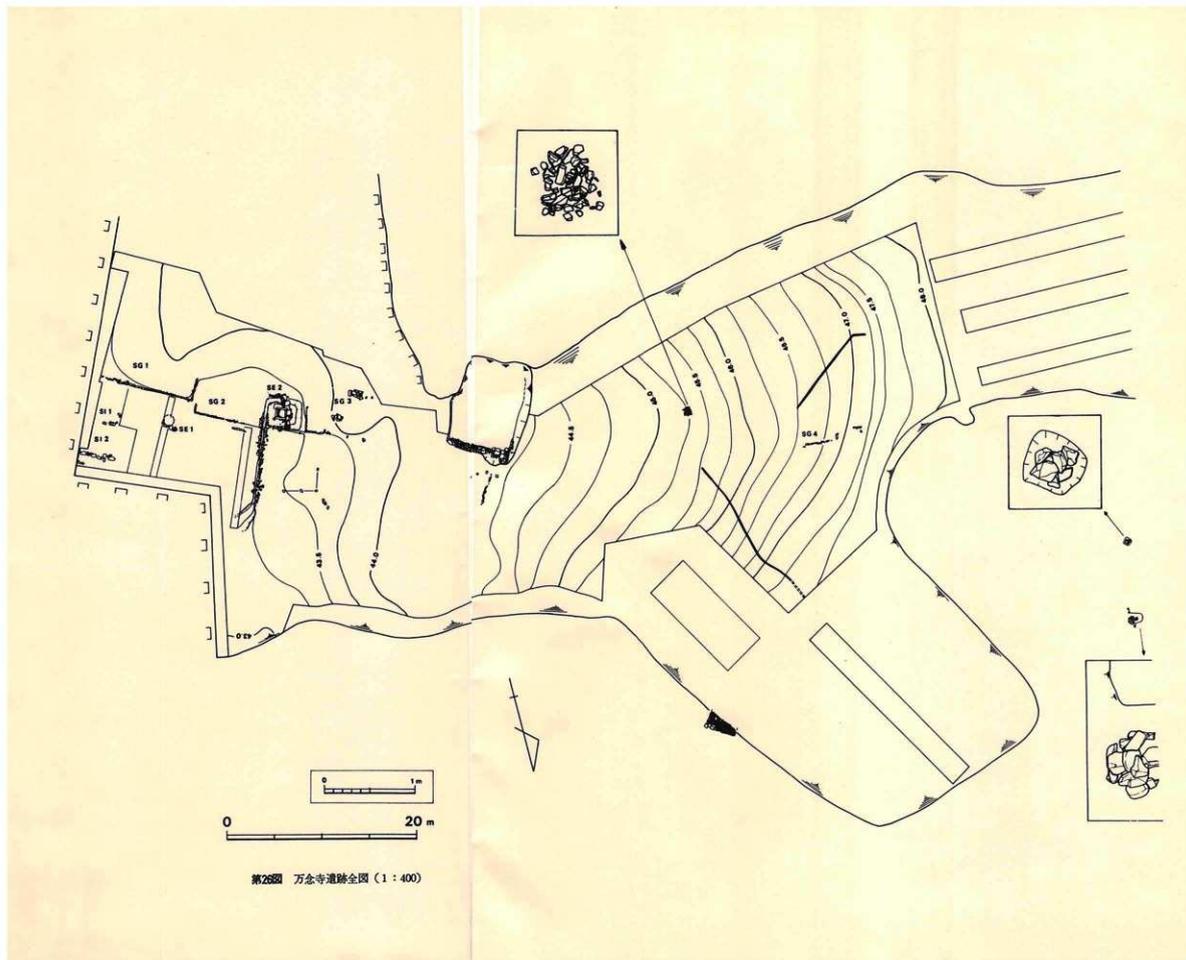
むしろ、本調査では「今岡八景」に記された「古庄屋」の存在を実証することとなった。検出した石組遺構などは建物跡とするにはあまりに粗雑すぎるが、建物に伴う何らかの区画としての意味をもち得たのであろう。(森重)

### 注)

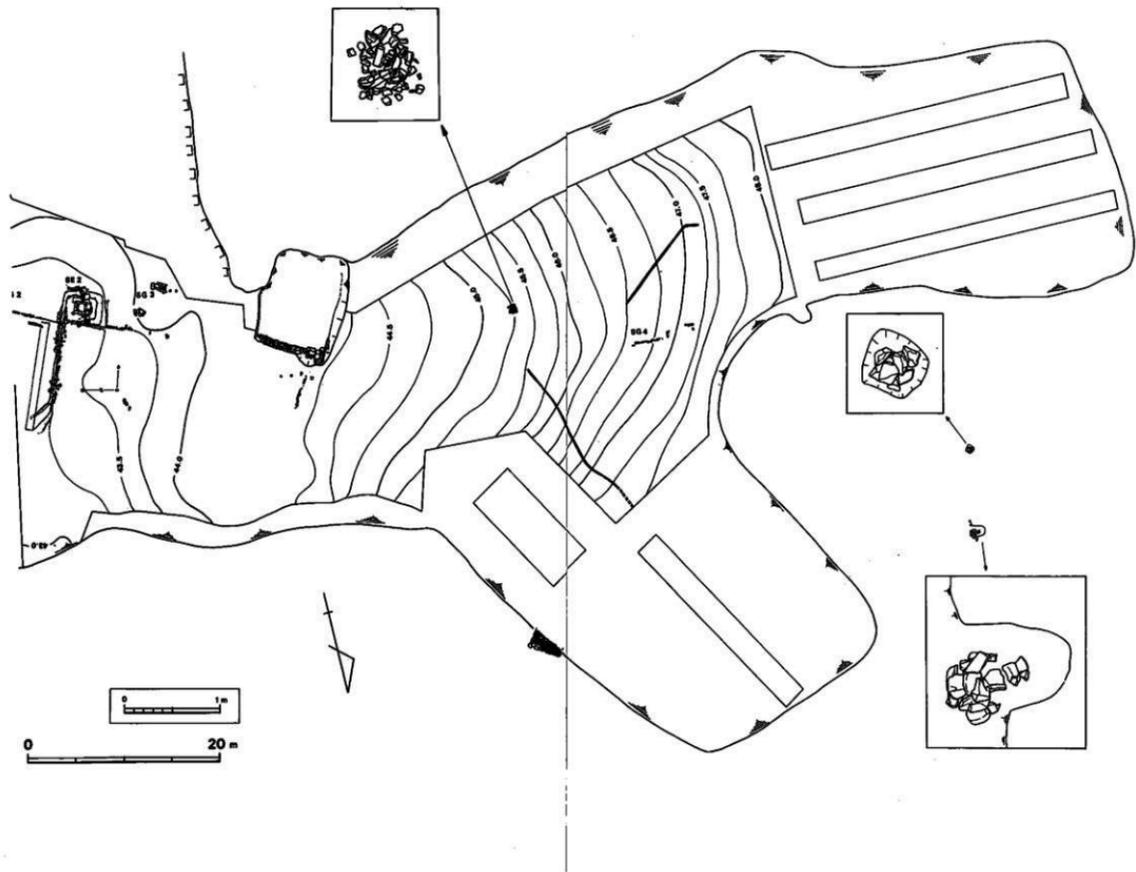
- (1) 正岡陸夫「鏡片副葬について」『古代学研究』90 1979
- (2) 京都府成山第2号古墳、京都府上大谷第15号古墳、福井県岩内山道跡D区1号土城、福岡県芦井遺跡跡第28木棺墓、愛知県岩津第1号古墳、奈良県出土のものがある。
- (3) 兵庫県教育委員会編「丸山古墳群一調査の概要」1977



第25圖 石鐘檢現第5号古墳実測圖及び遺構配置圖 (1:200)



第28圖 万念寺遺跡全圖 (1:400)





a. 石鏡権現道跡調査前全景（西より）



b. 石鏡権現道跡・住居跡（東より）

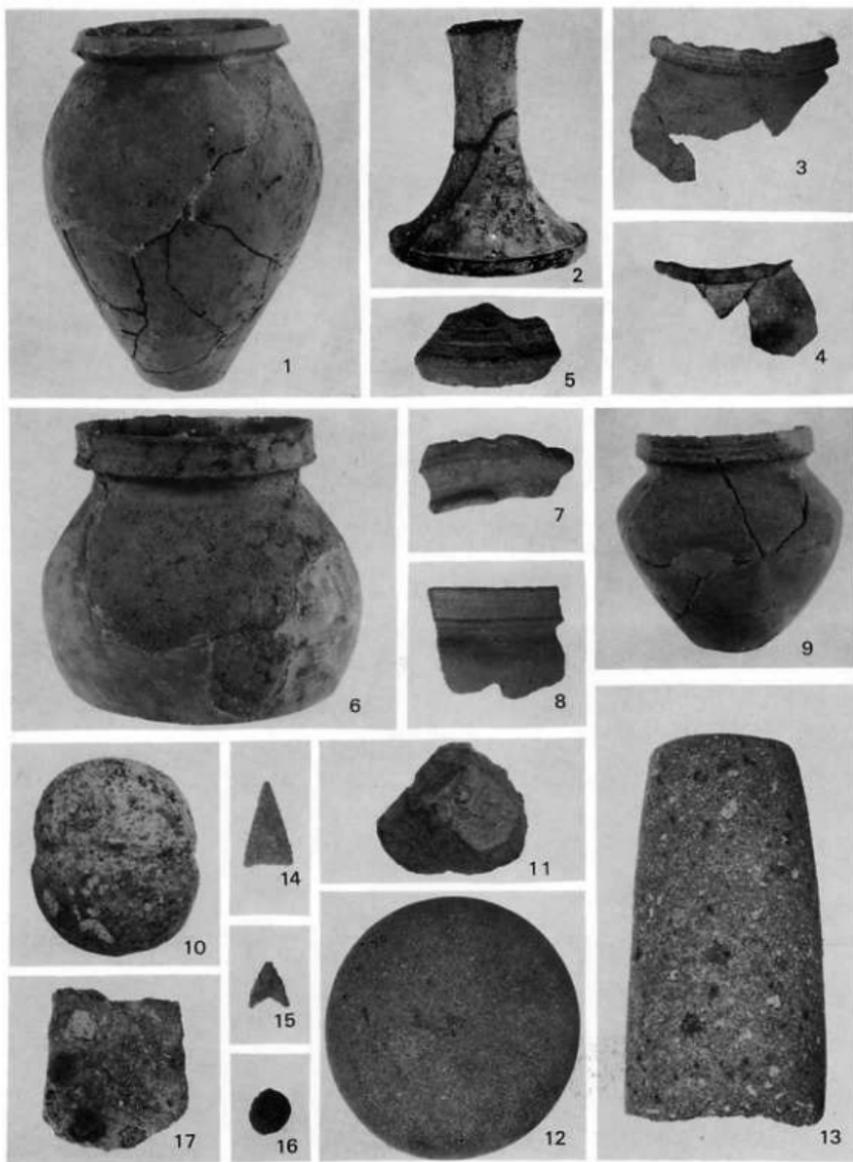
図版 2



a. 石錫樵現遺跡SB3-4-5、SK2（西より）



b. 石錫樵現遺跡SB7-8-9、SK10（南より）



石錫惟現遺跡出土遺物

1~4、10~13SB4、6SK2、7~9土器溜、15、16SB7.8.9覆土。



a. 石鐘権現第5号古墳全景（南より）



b. 石鐘権現第5号古墳主体部（北より）



a. 石鎚権現第5号古墳葬石状態（東より）



b. 石鎚権現第5号古墳葬石、くびれ部（東より）



c. 石鎚権現第5号古墳々丘南北断面北半部（東より）



a. 石鋪権現第5号古墳SK4 (西より)



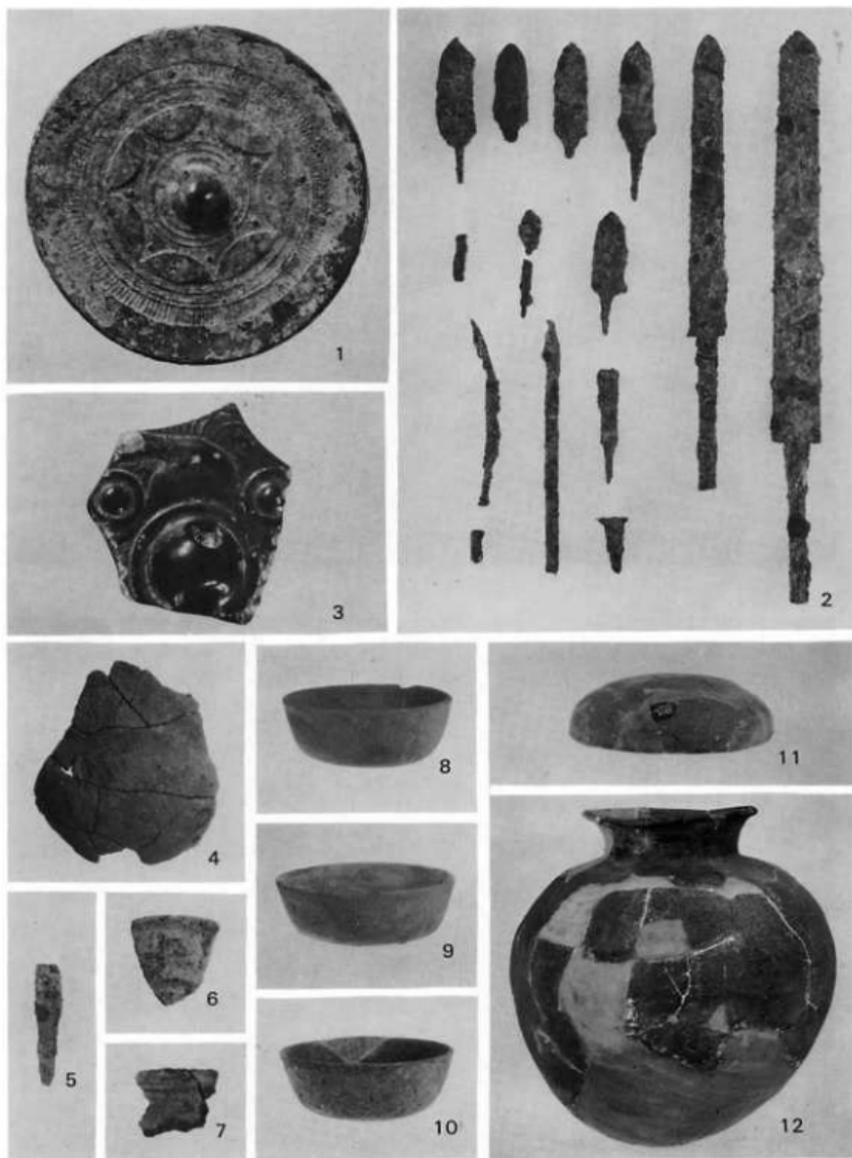
b. 石鋪権現第5号古墳SK14 (南より)



c. 石鋪権現第5号古墳SK16 (北より)



d. 石鋪権現第5号古墳SK18 (東より)



石鐘椎現第5号古墳出遺物

1・2 第5号墳主体部・3 SK14、5、SK16、7、SK13、6、8~12F、6、7区



遺跡遠景



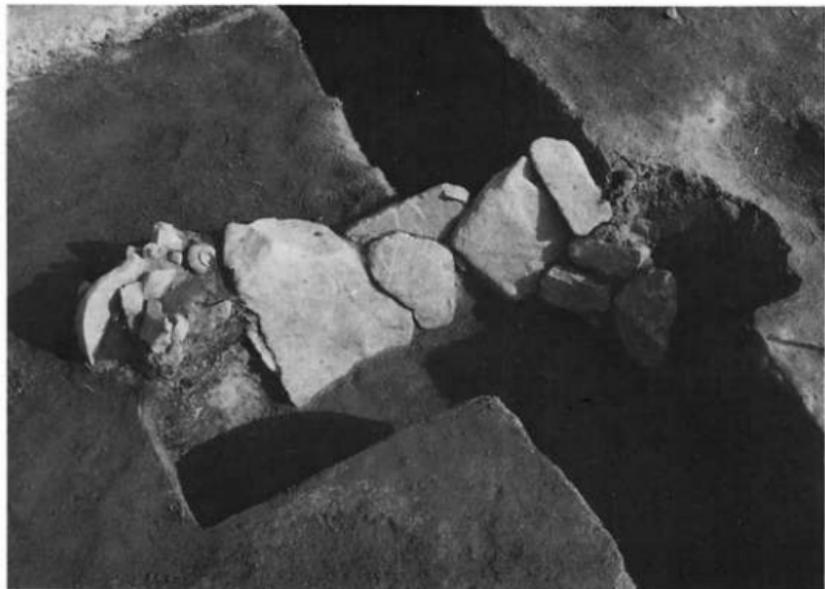
遺跡 跳平坦部全景



第2号井戸



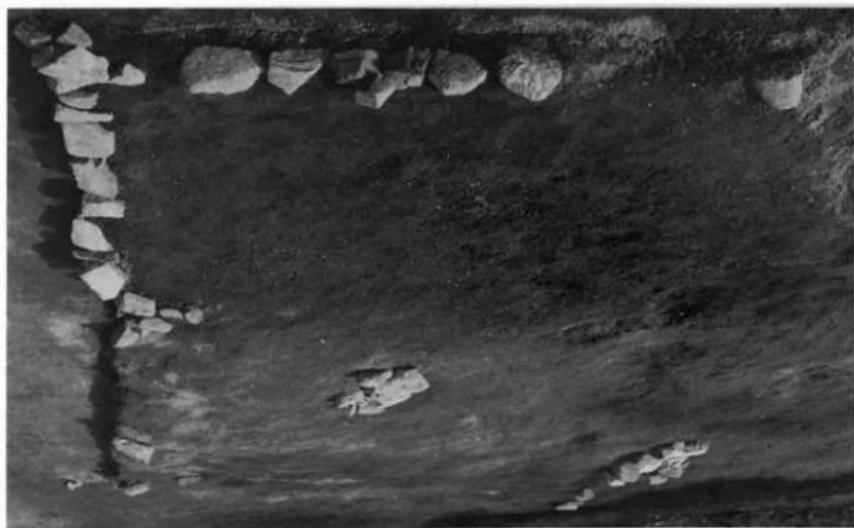
第2号井戸及び排水溝



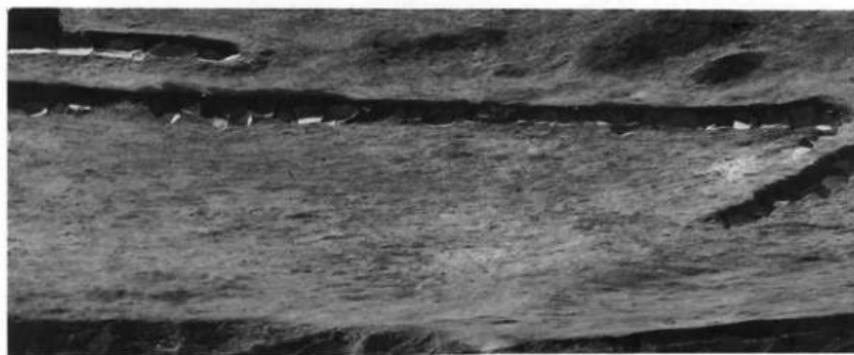
第1号井戸



池（北壁石組）



第1号石组遺構



第2号石组遺構



第3号石组遺構

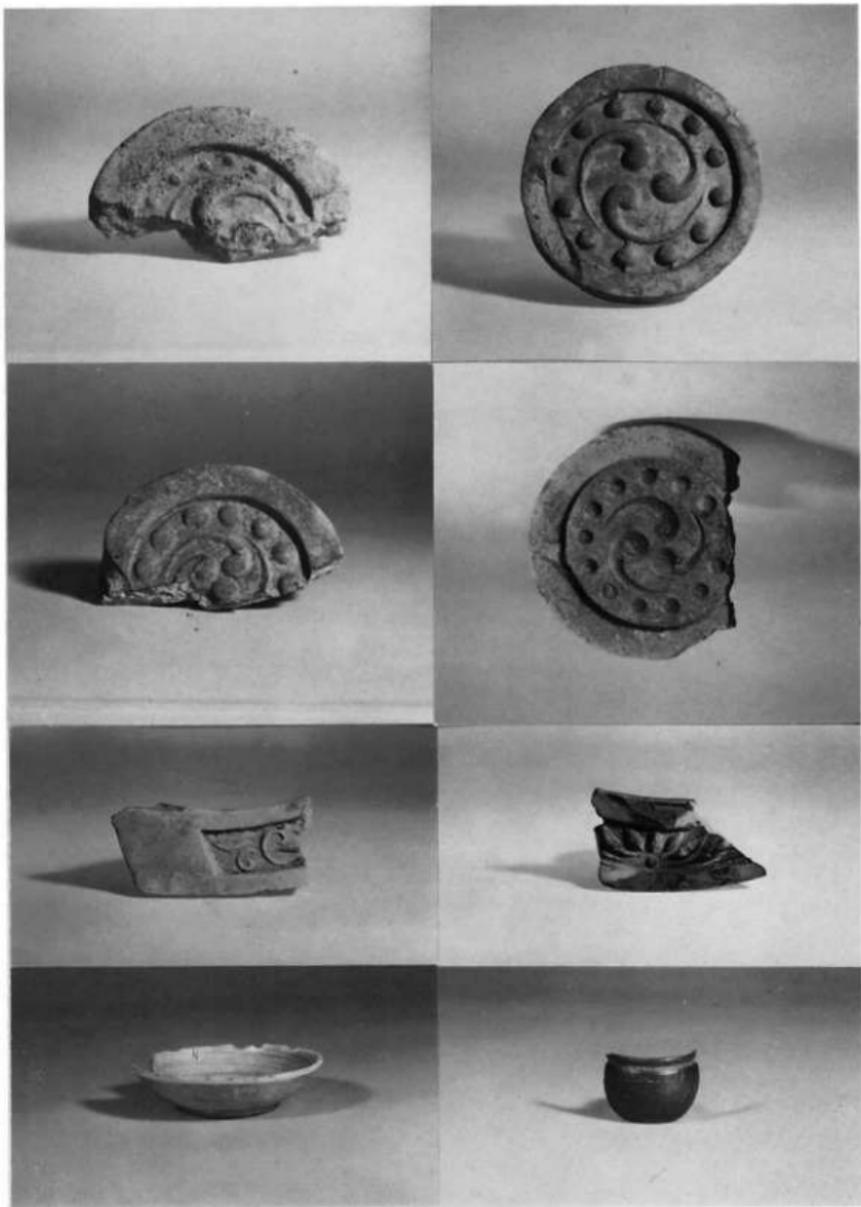


万年岳山中世墳墓

第3号集石



第2号集石



出土遺物

## 目 次

I はじめに	(1)
II 調査の概要	(2)
III 検出の遺構と遺物	(3)
IV ま と め	(11)

## 例 言

- 1 本書は、昭和55年度の国庫補助金を得て、広島県教育委員会が行った石鎚権現古墳群（福山市駅家町今岡所在）の発掘調査報告である。
- 2 本書の執筆は、嶋田滋・新谷武夫・福島政文が分担して行い、新谷が編集した。
- 3 遺構・遺物の実測・整図は、執筆者で分担し、写真撮影は嶋田が行った。
- 4 本古墳群の理解を深めるために、本書と同時に刊行される『石鎚権現遺跡群』（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター発行）を併読されたい。

## I はじめに

本書は大橋地区農地開発事業に係る遺跡の発掘調査報告である。大橋地区農地開発事業は福山市の急速な工業化に伴い、既存農地の転用などにより野菜生産農家の環境条件が著しく劣悪となったので、良い立地条件を持つ駅家町大橋地区に普通畑を造成し、野菜生産団地を造成することを目的とするものである。開発地区の総面積は75.5ha、造成面積は49.2haである。昭和47年に基本計画が申請され、昭和53年3月県農政部長から県教育長あてに、事業地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。県教委は同年4月分布調査を実施し、遺跡6ヶ所と試掘必要地点11ヶ所を確認し、その旨を回答した。昭和54年9月県農政部長から昭和55年度開発地区内の試掘調査の依頼があり、同月向永谷1ヶ所、大橋2ヶ所を調査した結果、大橋において、住居跡・古墳・土城跡などを検出した。11月県農政部長から設計変更が不可能な為、昭和55年度開畑地区内の遺跡について発掘調査の依頼があり、昭和55年8月文化庁長官あて発掘届を提出した。現地での発掘調査は昭和55年9～10月、昭和56年1月の2回に分けて実施した。また調査経費は370万円（国庫185万円、県負担分185万円）で実施した。

調査を実施するにあたり、広島県福山農林事務所芦品土地改良事業所、福山市教育委員会、地元大橋・今岡・向永谷地区の方々から多大な援助と協力を受けた。記して謝意を表したい。



右鏡権現遺跡群遠景（南東から）

## I 調査の概要

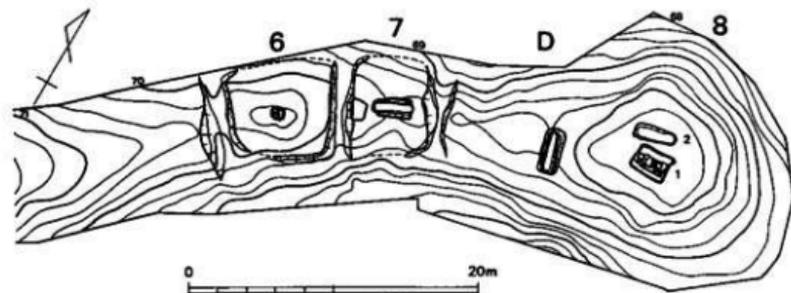
本遺跡は、泉宮大橋地区農地開発事業地の南東部隅の一角にある。標高70~75m、水山面からの比高35~40mの丘陵尾根上に立地する。調査は、東方にのびる尾根先端付近の鞍部（東西60m、幅9~19m、総面積約790㎡）について実施した。調査区域内には当初古墳2基が確認されていたが、全面にわたり表土を除去した結果、新たに古墳1基と土塚墓1基を検出した。発掘調査は、古墳3基・土塚墓1基について行った。古墳は尾根線上に一直線に並び、西方から石籠楯現第6号古墳・同第7号古墳・同第8号古墳とし、土塚墓については、号数を省いて呼称することにした。

第6号古墳は、尾根鞍部に位置し、東西両側の地山を溝状に掘削し、方形の墳丘（7×7.5m）を造り出したものである。墳丘上部は相当量流失しており、主体構造の詳細は不明であるが、主体底部とみられる部位には、小塚が敷きつめられていた。墳丘東割部において、土師器破片1が出土した。

第7号古墳は、西側の溝を第6号古墳と共有し、東側も地山を掘削して方形の墳丘（6.5×7m）を造り出している。主体は二重土塚で、組合せ式木棺が埋設されていたと考えられる。主体部直上から小型素文鏡1面が出土した。

第8号古墳は、尾根先端に位置する円墳（径14m）で、主体部は箱式石棺と土塚の二つが確認された。墳丘は地山を掘削して整形したもので、盛土部分はわずかであった。箱式石棺からは刀子片と被葬者の歯が出土した。土塚には割竹形木棺が埋設されていたものとみられる。

土塚墓は、第7号古墳の東側、第8号古墳西側墳丘裾部に位置する。長さ約3.2m、幅約1.1m、深さ約0.8mの二重土塚である。土塚内には割竹形木棺が埋設され、木棺直上から鏡1、土師器片1が出土した。

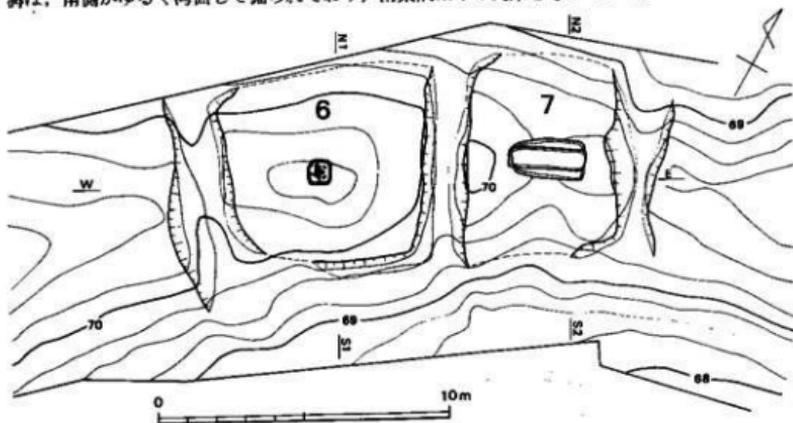


第1図 石籠楯現第6~8号古墳全体図 (1/400) (数字=古墳・主体番号, D=土塚墓)

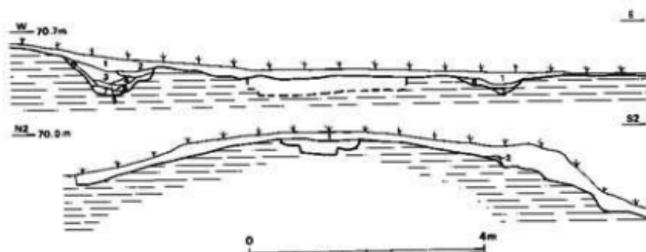
## Ⅲ 検出の遺構と遺物

### 1. 第6号古墳 (図版2・6)

本古墳は、第7号古墳と溝を境に接し、第5号古墳の東約40m、第8号古墳の西約25mに位置する。標高約70m、水田面からの比高約40m、幅7~10mの細い尾根上に立地している。墳丘は、尾根に直交する2本の溝(幅1.6~2.2m、深さ0.4~0.6m)を掘削し、その溝内の土を盛ったものである。現存の盛土部分は、10~15cmの厚さでみられるが、大部分は流失したものと考えられる。墳丘の形態は方形で、長さは東西7.5m、南北7m、高さは現在1.2mである。墳形は、南辺が北辺より若干短い(約2m)ので、ほぼ、台形を呈している。また、西側の溝は、南側がゆるく湾曲して掘られており、南東隅はやや丸味をもっている。



第2図 第6・7号古墳実測図 (1/200)



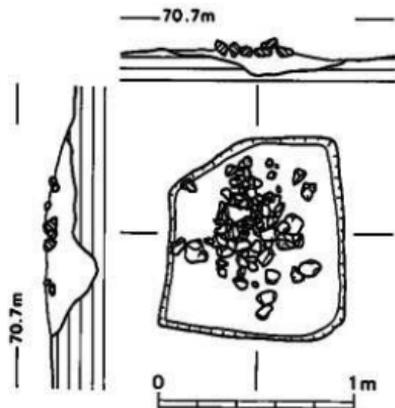
第3図 第6号古墳墳丘断面図 (1/100)

1. 黄褐色土 2. 暗褐色土 3. 石 4. 黄褐色砂質土 5. 暗黄色砂質土 6. 黄色砂質土  
7. 暗褐色土 8. 褐色砂質土 9. 暗褐色粗砂質土 10. 暗黄褐色砂 11. 花崗岩風化土

主体部は、ほぼ中央に位置する疎群がその痕跡とみられる。疎群は小角疎(辺長5~10cm)が約70~80cmの範囲にみられる。二層になっている部分も一部みられるが、ほぼ一層である。疎群の周囲には、東西0.9m、南北1m、深さ約0.2mの掘り方がある。掘り方の床面は凹門が多く、しかも平面形はいびつである。

遺物は墳丘南東隅の溝底部から土師器破片1点が出土したのみである。

土師器(第5図)小型器台の坏部の破片である。口径9.4cm、坏部深さ2.3cmを測る。厚さは3~8mmである。色調は明赤褐色を呈し、胎土は極めて精良、焼成は良好である。口縁はゆるく内湾し、頸部は丸味をもつ。坏部内面には細かいヘラ磨きがなされ、坏底部、口縁部はナデている。坏部外面は、磨減して不明であるが、ナデ調整と考えられる。



第4図 第6号古墳主体実測図(1/30)



第5図 第6号古墳出土土師器  
実測図(1/3)

## 2 第7号古墳(図版3・6)

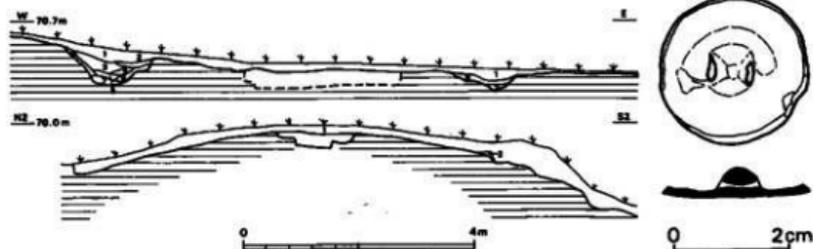
本古墳は、西側の溝を第6号古墳の東側の溝と共有しているかにみえる。立地は、第6号古墳と同様丘陵尾根頂部にある。第5号古墳の東約48m、第8号古墳の西約17mである。第6号古墳と接する溝は、暗黄褐色砂から黄褐色土まで計8層の堆積が認められる。堆積状態からみると、最初に堆積した暗黄褐色砂は、第6号古墳から流入したものとみられるが、両古墳の新旧関係を明確にすることはできなかった。

墳丘は、東西6.5m、南北7mの方形である。墳丘の現存高は約0.5mである。墳丘は、尾根にはほぼ直交する2本の溝(幅1.1~1.6m、深さ0.3~0.5m)によって区画されたものである。旧地形は、主体部付近で約32度南に曲がっていて、しかも尾根幅は若干狭くなっている。そのため、東側の溝は、若干浅く短いものとなっている。盛土とみられる部分は、第6号古墳同様に薄い(厚さ約10~15cm)が、地山等高線からみると、主体部の南側は、かなりの盛土をして整形したものとみられる。

主体部は二重土塚で内部に組合せ式木棺を埋置したものである。主軸はN25°Eで、頭位は東である。二重土塚の規模は、1段目長さ278cm、幅116~128cm、深さ6~22cm、2段目長さ

260cm, 幅63~77cm, 深さ10cmである。床面はほぼ平坦である。掘り方内部には, 3層の土が認められ, 中間に赤褐色土(朱を含む)が厚さ2~3cmみられた。

遺物は, 土坑中央のやや東寄りの黄褐色土中から鏡1面が, 鏡面を上にして出土した。鏡は小型素文鏡である。径26mm, 厚さ1mmで, 鈕は径9mm, 高さ4mmで, 径2mmの穴がある。重量は3.8gである。鏡面は深黒色を呈しツヤがあるが, 鏡背には細かい凹凸がある。

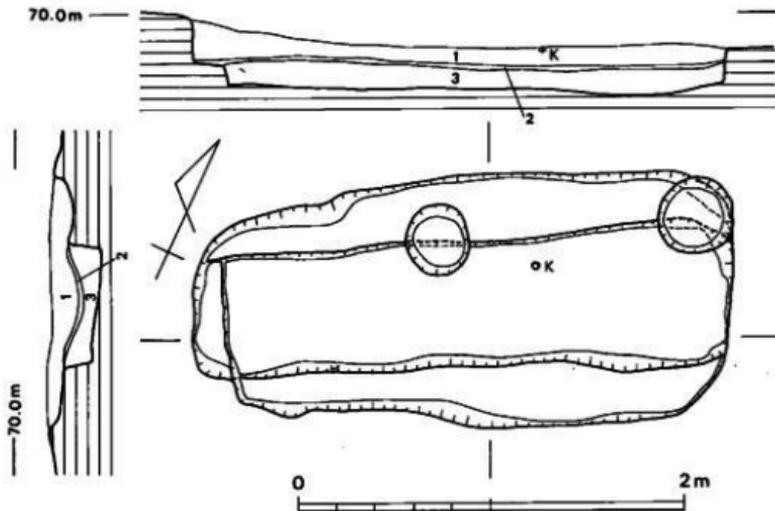


第6図 第7号古墳墳丘断面図(1/100)

1. 黄褐色土
2. 暗褐色砂質土
3. 暗褐色質土
4. 黄褐色砂土
5. 褐色砂質土
6. 暗褐色粗砂
7. 暗黄褐色砂
8. 暗黄褐色土
9. 花崗岩風化土

第7図

第7号古墳出土素文鏡実測図(1/1)

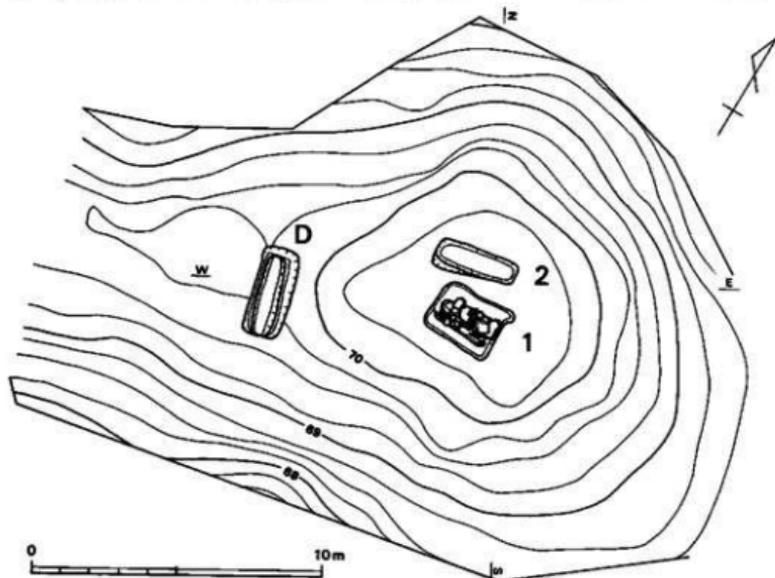


第8図 第7号古墳主体部実測図(1/30)

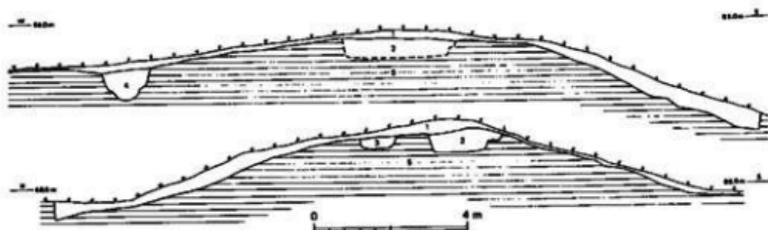
1. 黄褐色土
2. 赤褐色土
3. 暗黄褐色土
- K. 鏡

### 3 第8号古墳 (図版4・5・6)

本古墳群の東端に位置する円墳である。標高70.8m、水田面からの比高約40mを割り丘陵頂部に立地する。この地点で、尾根は南に屈曲している。墳丘の規模は、南北13.5m、東西14m、高さ2mである。花崗岩風化土の地山を削り出して整形した後、部分的に盛土したものである。地山上には、10~30cmの厚さで黄褐色パイラン土が堆積していた。墳丘の周囲には、葦石などの外部施設はない。また、尾根続きの西南部及び東南部において、墓域を区画する溝も設け

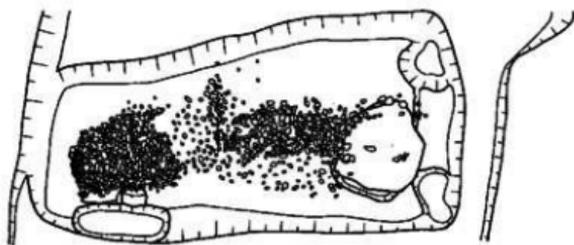
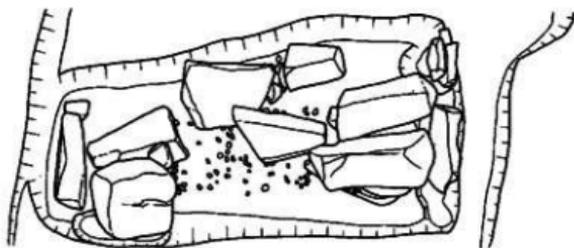
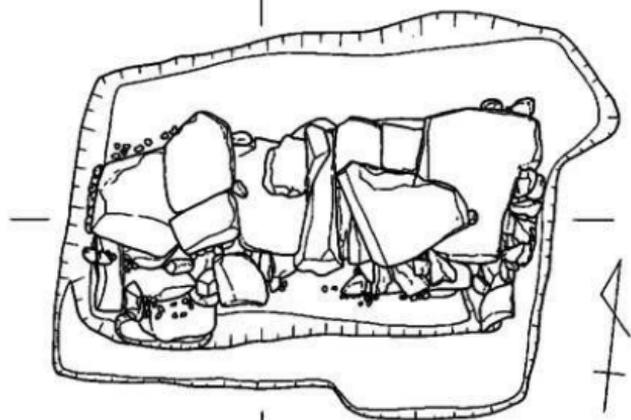
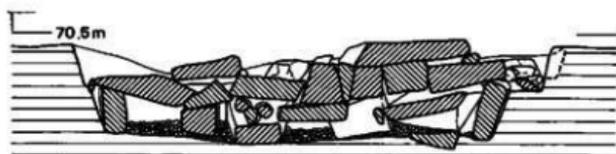


第9図 第8号古墳及び土墓実測図 (1/200)



第10図 第8号古墳墳丘断面図 (1/150)

1. 黄褐色パイラン土 2. 第1主体 3. 第2主体 4. 土墓蓋 5. 花崗岩風化土

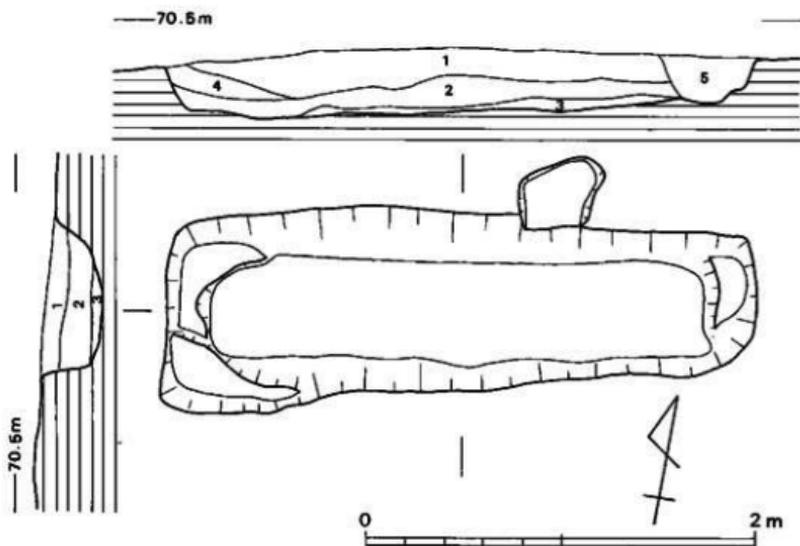


第11圖 第8号古墳第1主体部実測圖 (1/30)

られていない。頂部から裾部まで、ほぼ同じ傾斜が続いているので、墳裾を決定するのは困難であった。しかし、墳丘北側及び東側で、傾斜変換点がかすかに認められた。

内部主体は、墳丘頂部に2基礎認められた。主軸は、いずれもほぼ東西で、並行して埋置されていた。内部構造は、箱式石棺と木棺直葬の土坑である。石棺を第1主体とし、土坑を第2主体と呼ぶことにした。

**第1主体** 中央部よりやや南に偏在して構築され、東西方向(N89°E)に主軸を持ち、頭位は東である。箱式石棺は、その蓋石及び小口石はあまり乱れていなかったが、側石はほとんどが北側に倒れこんでいた。主体部はまず、墳丘頂部の地山に、長さ2.6m、幅2m、深さ0.6mの墓坑をほぼ垂直に掘り下げ、その中に箱式石棺を構築していた。この墓坑は、南側では、二重土坑のように段を持つが、北側にはない。石棺は内法で長さ180cm、幅は小口石の法量から頭辺47cm、足辺48cm、深さ23cmである。石材は、扁平な花崗岩が主で、蓋石10枚、小口石2枚、側石7枚である。板石の他、人頭大から拳大の不定形な石が数十個みられた。これは側壁の高さを一定にする為や隙間を埋める為に用いられたものである。棺床には径3~4cmの玉砂利を、2~5cm程の厚さで一面に敷きつめていた。また、東側頭部付近には枕石と考えられる板石が埋めこまれていた。



第12図 第8号古墳第2主体部実測図 (1/30)

1. 黄褐色砂質土 2. 黄褐色土 3. 明黄褐色砂質土 4. 明黄褐色土 5. 攪乱土

遺物は、棺内から刀子1と人歯19が検出され、棺床には少量の赤色顔料がみられた。

刀子（第13図、図版6）鉄製の直刃である。刃部中央部から先端部にかけて欠損している。刃部は現在32mm残っており、幅7mm、背部厚さ2mmを測る。茎は長さ12mm、幅5mm、厚さ1.5mmを測る。茎部には柄とみられる木片の圧痕があり、木目は茎背部の方向に対し30°上向きの角度になっている。



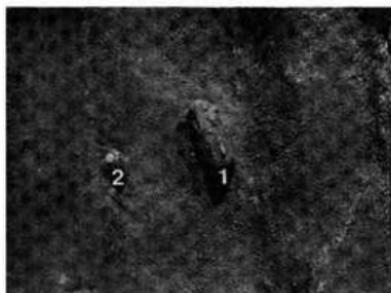
第13図 第8号古墳第1  
主体出土刀子実測図(1/2)

人骨（図版6）歯が19本確認された。その内訳は、前歯1・小臼歯5・大臼歯5・臼歯（破片のため部位不明）8である。臼歯はほぼ揃うが、前歯は15本不足している。

第2主体 第1主体の北側に沿って造られた土塚である。主軸は東西方向（N78°E）であるが、第1主体より9度北にふっている。全長304cm、幅75cm（東側）～100cm（西側）、深さ33cmを測る。土塚の構造は、二重土塚ではないが、塚内東端に1面、西端に2面の平坦面が作られている。掘り方は、ほぼ垂直に掘られている。床面は平坦でなく、中央部が少しくぼんでおり、横断面はゆるやかなカーブを描くU字形を呈している。このことから割竹形木棺（径約45cm、長さ約125cm）が使用されたものと考えられる。土塚内の土は3層に分かれ、上から暗黄褐色土、黄褐色土、淡黄色土であった。淡黄色土は、ガラス粉状の目の細かいものであった。内部からは、遺物や赤色顔料等は検出されなかった。また、第2主体は、第1主体よりも墳丘の中心部からさらにずれていること、主軸も若干ずれていることからみて、第1主体が作られた後に構築された可能性が強い。

#### 4 土塚墓（図版5・6）

第8号古墳の西側墳裾に位置し、主軸を南北方向（N20°E）に持つ土塚墓である。この土塚は、花崗岩風化土の地山に直接掘り込まれているのみで、墳丘などは持たない。尾根筋に直交してつくられ、床面は南側に若干低く作られている。土塚は二重土塚になっている。まず長さ321cm、幅108～120cm（南～北）深さ60cmの土塚を掘り、さらにその床面に長さ270cm、幅60cm、深さ23cmの土塚を穿っている。二段目の土塚は、小口はほぼ垂直に掘り込まれているが、横断面はU字形を呈している。このことから、埋葬主体には、割竹形木棺（径約40cm）が用いられたものと考えられる。土塚内の土層は、二段目の土塚上面まで黄褐色土が埋まり、赤褐色土、黄色土と続いている。黄色土は、目の細かいガラス粉状のものであった。赤褐色土は、黄色土より目が粗く、赤色顔料によって赤く染まっていた。遺物（鎌、



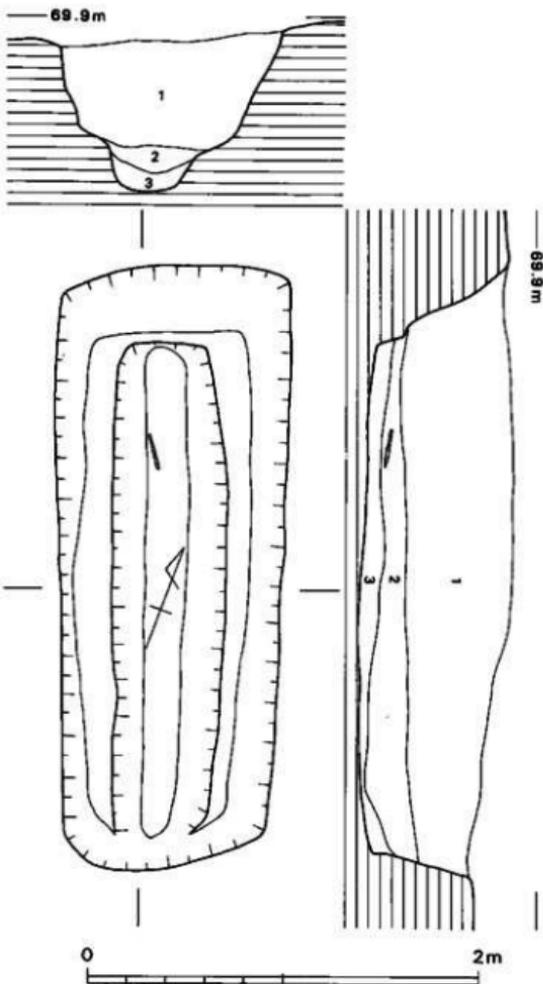
土塚墓遺物出土状態（北から、1=鎌、2=土師器片）

土師器片)は、この赤褐色土中から出土した。

遺物は、出土位置や層位からみて、被葬者の頭部付近の木棺直上に置かれていたものと考えられる。鉢1、土師器破片が検出されたが、土師器破片は小さいため詳細は不明である。

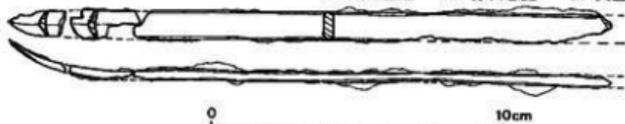
鉢(第15図)刃部中及び基部後端を欠尖しており、腐食は著しい。現存長20.5cmを測る。

刃部は長さ3cm、幅1cm、厚さ0.3cmで、大きく(14mm)上方に反っている。表面には錆があり、裏面にはゆるやかな裏スキ(1mm)がある。茎部は扁平で、幅1cm、厚さ3mmを測り、断面は矩形である。茎部は、端部を欠尖しているが、現存長17.5cmである。木や布の痕跡はみられない。現重量21.1gである。



第14図 土城墓突測図(1/30)

1. 黄褐色土 2. 赤褐色土 3. 黄色土



第15図 土城墓出土鈍突測図(1/2)

## Ⅳ ま と め

石籠権現古墳群は、8基の古墳で構成されるもので、本書に収録したものは、第6～8号古墳の3基及び土城墓1基である。いずれも前半期のもので、芦田川下流域の右岸における古墳のあり方の一部があきらかになった。以下その要点を集約してまとめにかえたい。

**立地** いずれも丘陵尾根上にある。立地から分類すると、第1～4号古墳(A群)と第5～8号古墳(B群)の2群に分けることができる。標高は60～75mにあり、第1・2・5号古墳が最高所に位置している。水田面からの比高も30～45mあり、駅家・神辺地区を一望のもとに収めることができる。

**墳丘** いずれも地山を掘削して墳形を整え、わずかに盛土したもので、自然地形を利用したものである。規模は、第8号古墳が径14m、第6・7号古墳が辺長約7mで、小規模なものである。墳形は、円墳(8号)・方墳(6・7号)の2種で、特に方墳のあり方は注目される。尾根に直交する溝で墓域を区画した簡素なもので、しかも一本の溝を共用しているかみえるのは、密接な関係を暗示するものである。

**内部主体** 組合せ式木棺・割竹形木棺・箱式石棺がある。木棺はいずれも土城内に直接取められているが、第6号古墳の場合、城底に礎を敷いていた。また、土城に取められていたのも割竹形木棺で、木棺が多くみられる。第8号古墳の主体部のあり方は、対岸の才谷第3号古墳<sup>(1)</sup>を想起させるものである。

**出土遺物** 小型素文鏡、銚、刀子各1点、土器片2、人骨の歯19で、質・量とも貧弱である。素文鏡は、径26mmと非常に小さなものであるが、鏡としての形態は整っており、銚上りも良い。類例は、最近鳥取県長瀬高浜遺跡でも出土しているが、当遺跡の場合、副葬品としてではなく、祭祀品として用いられたものである。この種の鏡は、いわゆるミニチュア品で、祭祀用のものが多く、第6号古墳のように副葬されているものは少いようである。

**年代** 内部主体の構造や副葬品のあり方、須恵器が全くみられない点などからみて、いずれも前半期のものである。しかし、年代推定の好資料となる土器は、第6号古墳掘出土の土師器1点のみである。土師器は、須恵器と共伴しない古式のもので、実年代は4世紀末～5世紀前半とみられる。各古墳の築造順序は明確でないが、ほぼ同時期のものであろう。

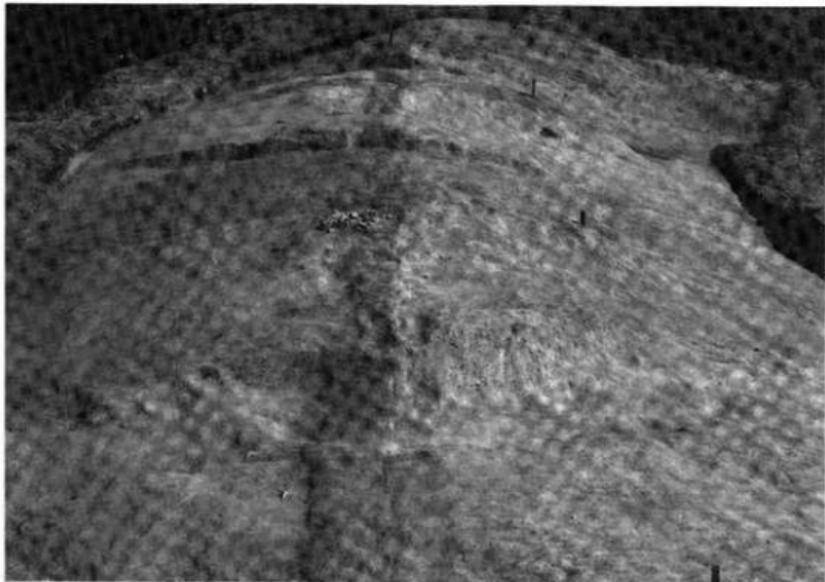
**被葬者** 第6～8号古墳及び土城墓は、その位置関係からみて、密接な関係を持っていたものと考えられる。特に第8号古墳の場合、夫婦墓の可能性が大きい。第5号古墳(前方後円墳)や南接する今岡遺跡(土城墓群)との関係も今後追求すべき課題である。

(注) 1 広島県教育委員会『県営野家団地造成地内遺跡発掘調査報告』1976。

2 鳥取県教育文化財団中部埋蔵文化財調査事務所「鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡」『考古学ジャーナル』№. 181 1980。



△調査前全景（西から） ▽調査後全景（西から）



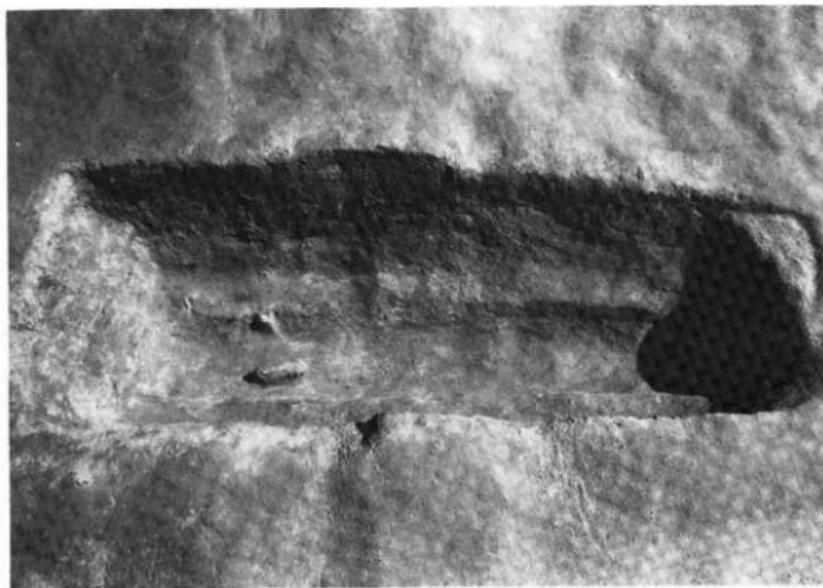
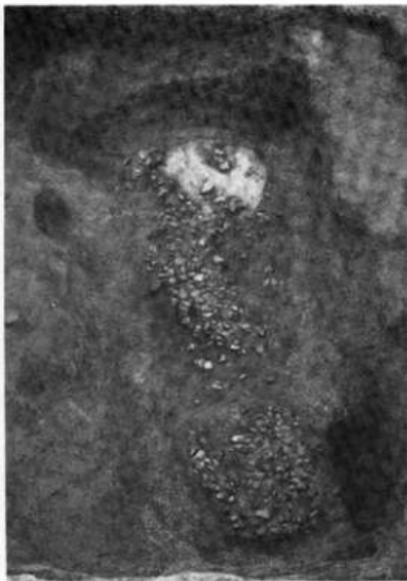
△第6号古墳全景（西から） ▽同主体部（南から）



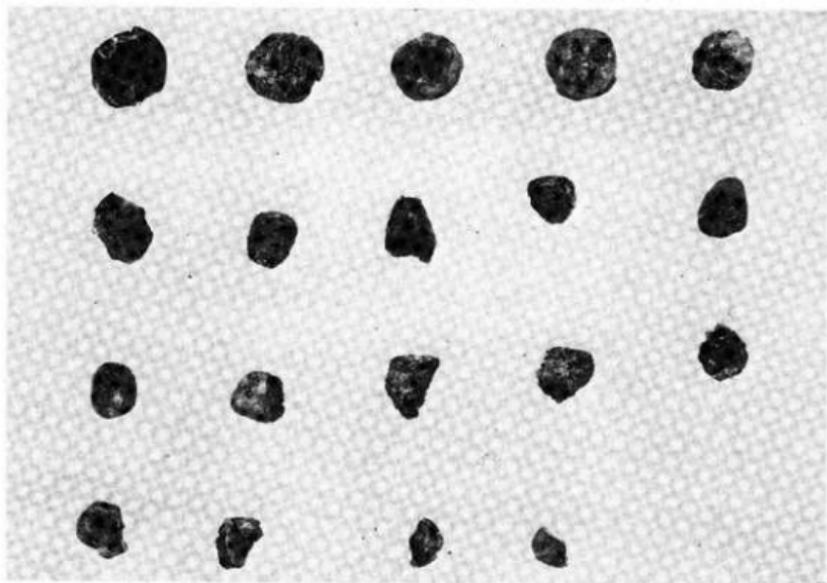
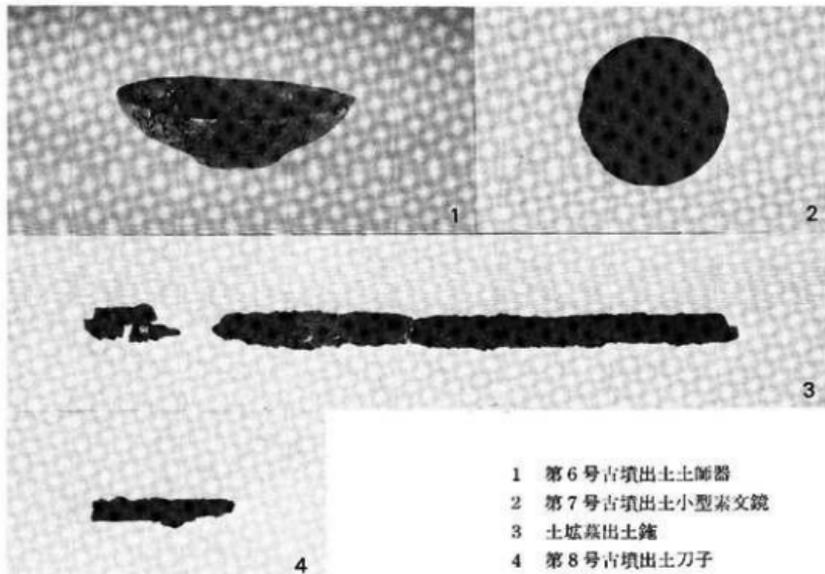
△第7号古墳全景（東から） ▽同主体部（西から）



△第8号古墳全景（西から） △同主体部（西から）



△第8号古墳第1主体 ◁蓋石除去後 ▷側石除去後（西から） ▽土城墓（西から）



△出土土器及び金属製品    ▽第8号古墳第1主体内出土人骨

1981年3月

石鎚権現遺跡群発掘調査報告

編集・発行 (財) 広島県埋蔵文化  
財調査センター

印刷 株式会社 柳盛社印刷所